阪大 NOW

―地域に生き世界に伸びる―

OSAKA UNIVERSITY
2009
12
No.114

トピックス

第9回大阪大学フォーラムをクアラルンプールで開催

クローズアップ

WWViews in Japan から WWViews in Osaka へ

COP15へ向けての世界市民会議の開催と学生から大学への提言

2009 12月号
No. 114

目　次

トピックス …… 2
クローズアップ …… 4
役員室だより …… 8
創立80周年記念事業 …… 20
ナウスペシャル …… 24
キャンパスニュース …… 26
表 彰 等 …… 53
人　　事 …… 61
インフォメーション …… 62
海外拠点だより …… 68
交流協定大学 …… 70
クラブ＆サークル …… 71
トピックス …… 72

表紙写真：適塾正面

江戸時代の面影が色濃く残る適塾玄関側の様子です。周囲は都会の建物に囲まれており、大阪で最も古い町屋である適塾との対照が印象的です。
表紙のカラーは冬の空をイメージしたものとなっています。

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第９回 大阪大学フォーラムをクアラルンプールで開催

大阪大学フォーラム2009実行委員長
日本語日本文化教育センター長　奥西峻介

第９回大阪大学フォーラムは、2009年11月３日と４日の両日マレーシアのクアラルンプールで開催されました。今回のフォーラムには、新しい目標が二つありました。2007年10月の大阪外国語大学との統合の成果を示すことと、国際社会との連携を模索することで、そのために選ばれたテーマは「東南アジアにおける日本語・日本文化教育の21世紀的展望：東南アジア諸国と日本の新たな教育研究ネットワークの構築を目指して」でした。フォーラムの企画は、日本語日本文化教育センターと言語文化研究科の日本語・日本文化海外連携コース（日本語・日本文化実践コース、日本語・日本文化専修コース）が共同で行いましたが、鷲田総長、辻国際交流担当理事を始め、留学生センター、文学研究科、バンコク教育センターの教員の方々、国際部の事務職員の方々のご協力を得て、全学的なバックアップのもとに実施されました。院生の皆さんも、実によく働いてくれました。また、今回のフォーラムは、マレーシア政府から全面的な協力のもとに、マレーシア教育省との共催という形で開催されたことも特色のひとつです。

初日は、日本語・日本文化の最近の研究成果についての講演とマレーシアと日本における日本語・日本文化教育の現状と課題について報告が行われました。第二日は、午前中に、日本語研究、日本語教育、日本文化の三分科会にわかれての研究発表とそれに基づく討論が行われ、午後には、午前中の議論を踏まえた全体会議がパネル・ディスカッションの形式で行われました。

今回のフォーラムには、開催地のマレーシアに加え、タイ、ベトナム、フィリピン、インドネシア、シンガポール、インドの各国から、いずれも主要大学で日本語・日本文化の教育研究に従事している研究者19名がパネリスト・発表者として参加しました。また、本学からは日本語・日本文化教育に関係する教員31名と院生18名が参加しました。延べ400名を越える一般聴衆は、大半が大学等の教育機関で日本語を教えたり、日本文化を研究したりする者で、開催地のマレーシアはもちろんASEAN諸国からも日本からも出席者が数多くありました。

この地域では、何十という大学や何百という中学校・高等学校で日本語が教育されている国が珍しくありません。しかし、多数の外国人専門家が一堂に会し、日本語や日本文化に関する学術的な話題を相手が日本人ではなく、外国人同士が日本語で議論し、それを何百という外国人が聴くという姿は、日本語を教える者にも強く印象に残るフォーラムとなりました。

この分野の外国人研究者は、言うまでもなく日本との結びつきが強く、また、本学と長年の交流がある者も少なくありません。しかし、彼ら自身の間の交誼は意外と希薄で、今回の邂逅を奇縁に、相互交流も盛んになると思われます。東南アジア地域に、日本語・日本文化の教育研究を核とする研究者同士あるいは大学間の協力、連携を構築する気運が生まれたのです。そして、近い将来、その中枢に本学も加わり、この地域の学術、教育活動において新たな国際貢献が期待できるようになったのが最大の成果であると言えるでしょう。

WWViews in JapanからWWViews in Osakaへ

COP15に向けての世界市民会議の開催と学生から大学への提言！

小林傳司（コミュニケーションデザイン・センター　教授　WWViews in Japan 実行委員会 委員長）
秋山泰洋（WWViews in Osaka 学生実行委員会 委員長）

待ったなしといわれる地球温暖化に向けて、この12月7日からデンマークコペンハーゲンで国連気候変動枠組み条約第15回締約国会議（COP15）が開催されます。2013年以降の温暖化対策の国際枠組み（ポスト京都議定書）を話し合う今回の会議は、世界の温暖化対策を方向づけるものとして注目されています。これに先立ち、COP15の交渉に当たる政府関係者に対して世界の市民の声を届けるための世界市民会議（WWViews）が開催されることになりましたが日本では、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（以下CSCD）が上智大学、北海道大学科学コミュニケーター養成ユニットとともに中心となってこの会議を企画・実施し、9月26日京都から市民の声を世界に向けて発信していきました。今回はその実施にあたり、本学の学生がどのようにかかわっていったか、また、その中で学生が主体となって開催したWorld Wide Views in Osakaがどのようなものであったかをご紹介していきます。

◆WWViewsの背景と目的

気候温暖化対策に関するCOP（気候変動枠組条約締約国会議）での政策交渉は、政府関係者、NGO及び経済界、産業界の代表によるトップダウン的な枠組みで行われています。その結果、この政策のもとで生活する一般的市民の感覚や意見は必ずしも十分に考慮されているとはいえませんでした。そのため、気候温暖化対策に関して世界の市民がどのような意見を持っているかに関する調査は、わずかであり（2007年のBBC調査）、それも大規模なアンケート調査であったため、人々の回答の理由や根拠はわかりづらく、そこにあるはずの多様な見解の相違を明らかにすることが困難でした。

COP15で決定された政策は市民の生活に大きな影響があると考えられています。これを受け、開催国の「デンマーク技術委員会（Danish Board of Technology）」と「デンマーク文化協会（Danish Cultural Institute）」の呼びかけにより、「COP15の政府関係者に、世界の市民の声を届けよう」という提案がなされ、この企画は World Wide Views（以下WWV）と名づけられました。今年の9月26日に地球温暖化について、世界同日開催で政府非介入の市民会議を行うというものでした。各国・各地域ごとに無作為に約100人の市民を集め、その市民に議論をしてもらい、COP15での話し合いに向けて提言をまとめる、という企画に、世界約40カ国が参加を表明しました。

WWViewsの参加国代表者たち（2009年3月）

今回のプロジェクトは、今後の気候政策に関する複数の設問に関して、十分に熟慮する機会を、可能なかぎり多数の国の市民に提供しようとする試みでした。則ち、適切な情報を提供するとともに市民相互の建設的な対話の場を設け、この場において市民が熟慮することを通じて、今後の気候温暖化対策に関する世界各国の市民の意見を取りまとめ、COPの場に提供したい。地球温暖化の進行のもとで、何らかの政策が実行されていく場合、人々の生活はこれに影響されざるを得ません。それゆえ、政策決定がなされる「前に」、人々に相談する（consult）ことが重要なのであるという考え方がこの取り組みの前提でした。いわゆる流行で意見の変わる「世論」ではなく、熟考した上での「輿論」として気候温暖化対策に関する意見の形成がなされることが大事であり、その具現化を目指したものがこのWWVなのです。

◆日本での開催意義

1990年代以降、日本でもNPO活動の活性化や市民参加への期待は高まっています。科学技術に関しては「コンセンサス会議」が開催され、まちづくりや河川改修問題など様々な場面で市民参加型会議が行われるようになってきています。21世紀は、公共的課題に関して政府や産業界のみならず、市民セクターとでも呼ぶべき領域が主体的に参加し、行動することが求められる時代になると予測されます。今回のプロジェクトでは、市民セクターの活性化という方向性を、より国際的な場で展開する点で、新たなフェーズを切り開く可能性をもっていると考えました。つまり、専門家ではない「ふつうの人々」が相互に建設的な対話・熟慮を行うことによって、地球温暖化対策について市民の側からも意見を表明しようというものです。アンケート調査による世論の把握ではなく、正確な資料や情報を踏まえた議論に基づき輿論を形成していく ― そうした可能性を模索する試みです。同時に、今回開発した仕組みは、気候温暖化対策のみならず多様な問題群に適用可能な汎用性を持っているといえます。注目すべきは、グローバリゼーションの進展の中、各国が課題としているのは、21世紀型の市民性（シティズンシップ）の涵養であるということです。これは言い換えると、社会的、公共的課題に対して自ら考え主体的に行動する市民の育成です。このような市民性の涵養において、世界各国の市民が共通のフォーマットで対話を行い、共有するという今回の試みは、今後の先進的モデルとなりうるものであり、多様な課題にも適用可能なものです。その意味で、今回の手法は、ユニークなグローバル民主主義の実験であるともいえます。

◆なぜ大阪大学なのか

残念ながら、日本で市民参加型の会議手法に取り組み、実施し、その可能性と限界を理解している専門家はまだ数少ないのが現状です。幸い、大阪大学がCSCDを2005年に設立し、ここにそのような専門家が結集しました。CSCDとはまさに、多様なステークホルダー間のコミュニケーションの「仕組み」のデザインを研究し、実践することをミッションとした組織なのです。今回のWWViewsはセンターのミッションと合致するのみならず、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとする大阪大学の社会貢献事業としてもふさわしいものであり、開催にあたっても重要な役割を担っていくことができました。おそらく、日本の大学でこの試みを実施する能力を持つところは他にはないと思います。

では、本学の学生はどのようにして今回のプロジェクトに係わっていったのでしょうか。

◆学生の参画にあたっての経緯

きっかけは、2009年前期に行われた大阪大学CSCDの小林傳司教授による授業『科学技術コミュニケーション理論と実践』に大学院生として参加したことに端を発しています。そこでWWV in Japanの進行・内容に関する議論やワークショップが行われました。20名ほどの受講生からなる講座で、3グループに分かれて取り組みを行っていましたが、その後小林教授から『学生が主体となって、学生によるWWVをしてみたらどうだろうか』という提案がなされました。

それによりWWV in Osakaが生まれ、実践授業の受講生らが中心となりWWV in Osaka学生実行委員会が発足しました。また、大阪大学環境サークル GECSをはじめとする有志も運営側として参加することとなりました。

◆取組の２つの意義

WWV in Osakaでは、2009年9月26日に京都で開催されたWWV in Japanをお手本に、学生の立場から地球温暖化問題をどのように捉え、考えていくのかを、演習科目の翻訳作業を通して会議の内容を理解したことをもとに、本番での市民役やファシリテーター役を学生自ら体験し、議論の深みを増していきました。

学部や研究科の枠を越えて様々な背景を持つ学生が、地球温暖化について議論しあい、COP15政府交渉代表団への提言と大学側への提言をまとめていくという試みを主体的に取り組んでいったのです。その結果、温暖化に対する認識や取り組みもさることながら、総合大学である本学で学ぶことの強みでもある、“横断的な学生のネットワーク”をつくることができたことは、大きな成果の１つであったと思います。

また、一連の動き中で机上の理論にとどまらず、『科学技術コミュニケーション理論と実践』を通して、利害の対立するもの、専門家と非専門家の間をどうコミュニケーションとしてつないでいくかということ、その手法をグローバルな取組に中で実体験できたことは、何物にも代えがたい経験だっ

たと思います。議論の最後には、学生の立場から国の環境対策に対する提言と、大学側への提言をまとめていきました。

◆WWV in Osaka の実施と提言

2009年9月30日に本学で約30名の学生とともに、WWV in Japanと同じ資料を使い、右にあるような議論をしました。

テーマセッションはWWV in Japan をもとに以下のように行われました。

1．テーマの紹介とビデオの上映
2．問い（[WWV 参加者への質問]）の提示と説明
3．グループごとのディスカッション
4．各参加者の回答の投票（第四テーマセッション後すべてのセッションの投票結果の報告を行った）

- 開会（イントロダクション）
- 第１テーマセッション：気候変動と、それがもたらす結果
- 第２テーマセッション：長期目標と緊急度
- 第３テーマセッション：温室効果ガス排出への対応
- 第４テーマセッション：技術および適応策のコスト
- 提言セッション
- 閉会（今後に向けて）

提言セッションでは以下の二つのテーマについて各グループ（全６グループ）でメッセージをまとめた後発表、投票によって会としての提言を決定していきました。

※学生版WWViews in Osakaは
http://wwv-japan.net/docs/WWVosaka.pdf
※WWViews in Japanは
http://wwv-japan.net

１．COP15政府交渉代表団に向け

グループ	タイトル	内　　容
1	参加国の拡大と柔軟性	新たな気候変動の枠組みに、地域差や経済力の差を考慮した上で、途上国も含めた多くの国々に参加することを求める。ただし、この枠組みの参加には国の状況に応じた離脱などのような柔軟な対応を認める。
2	環境を市民レベルへ	削減目標を達成するために、私達が具体的に何をすればいいのか、何を我慢すればいいのか、市民レベルに落として教えて欲しい。
3	「目標」から「実現」へ	目標を立てるだけではイミがない。実現を可能にするシステム作りを早急に。罰則規定等を利用して対策をした方が得をするシステムつくりを。全ての国が協力することが必要だが、負担には大きな傾斜をつける必要がある。
4	優先順位と役割分担	様々な分野の専門家の意見をふまえ多角的な分析を行い、環境問題に取り組む順位を自国の状況をふまえ決定しましょう。途上国は新エネルギーを取り入れた社会システムづくりをする。また、将来、先進国になることを視野に入れ、自国の国際的立場を考えるべきである。
6	世界共通削減指標と制度	ＧＤＰ、CO_2排出量、人口等に基づいた削減率指標を世界共通でつくり、長期目標に向け、２、３年ごとに段階的に目標を検討する。また、発展途上国への支援にはアセスメントの実施と制度設計を行う。
7	議論の前提を再確認	将来の自分たちはどうありたいか、将来の“あなたたち”のために何ができるかを常に意識し、数多くある守るべきもの、尊重すべき考え方に、どのような優先順位で取り組むかを自覚し影響をける全ての人々が情報を共有し、意思決定を批判できるようなシステムを構築してほしい。

小林　傅司（こばやし　ただし）
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 教授
1954年京都市生れ。78年京都大学理学部卒業。83年、東京大大学院理学系研究科博士課程科学史科学基礎論専攻修了。専門は科学哲学、科学技術論。福岡教育大学、南山大学を経て、2005年４月より現職（副センター長）。

秋山　泰洋（あきやま　やすひろ）
大阪大学大学院経済学研究科経営学系専攻　ビジネスコース　修士１年

2．大学生としての大学側への提言

グループ	タイトル（ ）内の数字は得票	内　　容
1	Eco University（７）	・建物自体のエコ化（太陽発電・屋上の緑化・窓の拡大・照明のＬＥＤ化等） ・技術開発（ソーラー、核融合等の新エネルギー分野）促進（研究助成金増加） ・エコアイデアコンテストの実施・環境に関する授業とその市民公開
2	阪大eco ブランド（３）	・eco なら阪大→「eco 阪」というブランド作り・各研究室が分野の垣根を越えて協力しあう ・環境商品を生協で扱い、学生の使用を促進する等
3	知る→取り組む→発信する（７）	・知る（学部を越えたセミナーの開催・専門家と非専門家の意見交換会・学内環境調査） ・取り組む（省エネ助成金制度・弱冷房徹底・デポジットシステム強化・車→自転車通勤へ） ・発信する（一般人に向けたイベント開催・各学部協働で疑似議定書作成・大学の看板を掲げた上で環境会議へ参加する）
4	大学エコパーク計画（12）	・大学を小さな実験場へ　・目的（様々な分野の学生による多様なアイデア公募促進・エコの視覚化の推進）・節水や発電、リサイクルの全てを体感できるような設備を導入する
6	大学発の提言作成（12）	・様々な大学がネットワークを構築し各々が少しずつ資金と人材（各大学の環境をテーマに研究している研究室から少人数）を出資する研究グループを構築し、提言と報告（情報収集や政策分析等）を行う。 ・その際に地域のコミュニティを巻き込んだり、企業の研究参画を促したり働きかける。
7	Change（13）	・外部への変化、☆地域への公開（環境情報・研究経過）☆環境技術で名を売る（企業と協働等）・内部への変化　☆節約（省エネ機器導入・資源節約等）☆研究費増加（環境に対する研究への国の援助）・それらを踏まえ学生が朝型に変わることで無駄を削減する。

11月26日に行われた各理事の方々への報告会では、次のことを中心に報告させていただきました。・学生が具体的に何かを発信する機会の増加・組織横断的な協力関係の構築・市民等外部へ向けた発信する機会の増加ということです。各理事の方々と学生との間で活発な意見交換ができたことは、今後に向けての大きな一歩だと感じました。

◆全体を振り返って

今回の会議では WWV in Japan の付随イベントとして開催され、学生の立場から地球温暖化問題をどうとらえているか意見を政府や大学側へ届けるために開催されたものでした。今まで多種多様な学生が一堂に会し大学側や政府に対する提言を議論の上まとめることはあまりなかったのではないでしょうか。イベント終了後、参加者に感想を聞いた結果では、ぜひまたこういう機会を設けてほしいという声が多くよせられました。本家の WWV in Japan が「市民」が政策決定の場に自らの声を届ける「方法」を示したように、このイベントが「学生」が大学へ自らの意志を伝える「方法」を示し、これからの大学環境の改善に役立つことができればと思います。(秋山)

WWV in Japanの実施を引き受けた段階で、日本代表としての責任感を持つと同時に、教育・研究機関としての大学が実施するということの意味を考えた。そこで、教育面でこの企画を利用できないかという観点から、演習授業で取り上げ、さらにその経験を生かして、本番のWWV in Japanでのスタッフとして協力してもらうことにした。しかしそれだけではもったいないという思いから、学生主体のWWV in Osakaが実現したのである。学生が主体となって実施した、WWV in Osaka では、議論に参加した人々は大阪大学の学生が主体ではあったが、それ以外に東京大学、京都大学、関西大学の学生も参加していた。こういう形での、他大学との交流は大学ならではのものと思う。

また、学生版の議論を見て感じたことは、学生は、本番に参加した市民よりも事前に配布した資料を熱心に読んできているということであった。地球温暖化問題は大変複雑な問題であり、事前配布の資料も、読みやすいように工夫はされているものの、かなり高度な知識が詰まっている。学生はこういったものを読み込むことを本務とするためか、大変熱心に読んできたようで、その結果、彼らの結論や提言は、ある意味で「保守的」なものとなっている。問題の難しさを理解してしまい、理想を安易に語れないということに気づいたのではないだろうか。それともう1つ、学生が楽しそうに、熱心に議論している姿を見ることができたことが、何よりの収穫であった。知的な討議は楽しいものなのである。(小林)

役員室だより

2009.12　Vol.33

大学の動き

第３回経営協議会を開催

今年度第３回経営協議会を11月30日(月)に、中之島センターで開催しました。学外委員９名、学内委員13名が出席し、２時間にわたり審議、意見交換が行われました。鷲田清一総長から創立80周年記念事業の取り組みや大阪大学会館（現イ号館）の再生整備の趣旨などが説明され、現在の国立大学を取り巻く状況や教育研究、大学運営について忌憚のない意見をいただきました。

会議冒頭であいさつする鷲田総長

事務改革の取組み状況

事務改革については、事務改革策定ワーキングにおいて、事務処理業務の効率化を目指した具体的方策（業務の標準化・一元化、IT化による事務改革等）の検討を行っていましたが、７月及び９月の部局長会議において、いくつかの詳細案が了承され、現在、以下のプロジェクトを立ち上げ、実施に向けた検討を進めているところです。

プロジェクト名	実施時期
勤務管理プロジェクト	H22. 4. 1
兼業手続き見直しプロジェクト	H22. 4. 1
予算決算業務見直しプロジェクト	H22. 4. 1
債権業務見直しプロジェクト	H22. 4. 1
旅費・謝金関連処理プロジェクト	H22.10. 1
全学グループウェアプロジェクト	H22. 4. 1
全学IT認証基盤･マスターDBプロジェクト	H22.10. 1

大阪大学創立８０周年記念事業

本学は、平成23年（2011年）５月１日(日)に創立80周年を迎えます。現在、平成23年（2011年）５月１日(日)に、記念式典、記念講演、記念シンポジウムの開催を大阪国際会議場で、またその前後の日に他の行事を大阪市中央公会堂または大阪国際会議場で開催する予定です。

なお、５月１日前後だけでなく、「創立80周年記念YEAR」として年間を通じて、学内の重要な記念行事や公開講座など例年開催されている定常的な行事を創立80周年記念事業と連動して開催することとしています。

詳細は、20ページをご覧ください。

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、10月及び11月の役員会で次の事項が承認されました。

・医学部附属病院中央診療施設「放射線治療部」の設置（平成21年11月1日）
・大阪大学海外拠点本部の整備【上海教育研究センターの設置】（平成22年2月1日）
・大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センターの設置【医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センターの廃止】（平成22年4月1日）

大学留保ポストについて

本学では、教員人件費（外部資金を除く）の5%に相当する常勤教員のポストを本部が留保し（大学留保ポスト）、大学経営における戦略的・効果的な人的資源の活用を図るとともに、大阪大学における教育研究等の一層の高度化・活性化に資するため、全学的な観点から適切な再配分を行っています。

大学留保ポストのうち、全学操作定員の解消に伴うもの（共通教育関係分など）については、中期目標期間毎に見直しを行うこととなっており、総合計画室で該当部局を対象にヒアリングを実施するなど必要性の検討を行い、11月の役員会において、共通教育における従来からの担当コマ数を確保することや責任体制を明確にすることなどの配分条件を付して、次のとおり決定しました。

配分ポスト数	共通教育関係 35（36） 歯科技工士学校分 1（1） 計 36（37） ※（ ）書きは第1期分
配 分 期 間	第2期中期目標期間（平成22年4月1日～平成28年3月31日）

また、毎年度、必要な部局等に配分を行っている大学留保ポストについては、要望する部局等を対象に、総長・理事によるヒアリング及び総合計画室によるヒアリングを実施し、その必要性などについて十分な検討を行っております。なお、平成22年度大学留保ポストの配分に係るヒアリングは下記の日程で実施する予定です。

総長・理事によるヒアリング	平成22年1月25日（月）～28日（木）
総合計画室によるヒアリング	平成22年2月 2 日（火）～ 3 日（水）

第２期中期目標・中期計画、平成２２年度計画の策定

第２期中期目標・中期計画については、６月に素案を文部科学省へ提出しました。（本学ホームページの「法人情報の公表」に掲載　http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho）

その素案について、11月６日の国立大学法人評価委員会総会で検討が行われ、その結果を踏まえ、文部科学大臣から本学へ修正意見が通知されました。今後、この修正意見を踏まえ、学内での検討を進め、１月中旬頃に原案を文部科学省へ再提出する予定です。

また、同時並行で平成22年度計画の策定も進めております。各部局に作成いただいた平成22年度計画を踏まえ、各室等で原案を作成し、10月に立ち上げた各室員で構成する「平成22年度計画作成ワーキング」において、各部局、各室等と摺り合わせをしながらまとめていきます。（平成22年３月末に文部科学省に提出）

なお、「平成22年度計画作成ワーキング」は、次期中期目標・中期計画検討ワーキングから継続したもので、作業メンバーは次のとおりです。

平成22年度計画作成ワーキング委員

氏　　名	所　属　室	所　属　部　局　等
西　田　正　吾	総合計画室長	理事（主査）
土　井　健　史	評価室長	理事
滝　澤　温　彦	総合計画室	理学研究科
川　端　　亮	評価室	人間科学研究科
小　林　傳　司	教育・情報室	コミュニケーションデザイン・センター
井　上　克　郎	総合計画室	情報科学研究科
山　中　伸　介	評価室	工学研究科
原　島　　俊	研究・産学連携室	工学研究科
野　村　美　明	広報・社学連携室	国際公共政策研究科
高　田　健　治	国際交流室	歯学研究科
三　成　賢　次	総合計画室	法学研究科
堀　井　俊　宏	総合計画室	微生物病研究所
村　上　伸　也	評価室	歯学研究科
吉　川　秀　樹	財務室	医学系研究科
岡　村　康　行	人事労務室	基礎工学研究科
高　杉　英　一	広報・社学連携室長	理事（オブザーバー）

『大阪大学環境報告書２００９』の公表

「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律（環境配慮促進法）」に基づき、本学における2008年度の環境パフォーマンスデータや環境保全活動を紹介する『大阪大学環境報告書2009』を作成し、公表しました。本報告書のダイジェストを、インフォメーション（64ページ～65ページ）で紹介しています。

本報告書の詳細は、大学公式ホームページに掲載しており、「法人情報の公表」ページからアクセスできます。
http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/files/report09.pdf

教育・情報室

役員と若手教員との懇談会

第6回の「役員と若手教員との懇談会」が、11月12日(木)にコンベンションセンター会議室で開かれました。これは、若手教員の視点から、大阪大学の抱える諸問題や大阪大学の将来像について幅広く意見交換を行うことを目的として、各理事の担当のもとに連続して開催しているものです。今回は「大阪大学における教育の将来像について」をテーマとし、総長・理事・監事の出席のもと、准教授・助教ら33名の若手教員が全学から参加して活発な討論が行われました。参加者は、人文系、理工系、医歯薬系、研究所/研究センターという4つのグループに分かれ、それぞれのファシリテーターのもとで個別討論を進めた後、全体討論を行いました。参加する若手教員は、「大阪大学における教育への希望について」及び「大阪大学における教育の長所と問題点」という2項目について、アンケートに事前に回答しており、これに基づいて議論が行われました。この懇談会の結果、学生の自発性や主体性を重視する教育、コミュニケーション能力の養成、専門教育と教養教育の関係のあり方、新しい形式の授業の必要性、学内への教員への情報周知の難しさの問題などについて、若手であるからこそ可能となる重要な指摘や提案が行われました。今後よりよい教育を実現していくために生かしていく予定です。

ステューデント・コモンズ開設記念式典と共通教育賞表彰式

11月9日(月)に、実践センター教育研究棟Ⅰの1～2階に完成した、ステューデント・コモンズの開設記念式典と祝賀会が開催されました。総長と理事のほか、名誉教授、歴代の全学共通教育機構長、旧制浪速高等学校同窓会・旧制大阪高等学校同窓会の会長らの出席のもと、ステューデント・コモンズに集結する大学教育実践センター、コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)、グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)、学際融合教育研究センター、留学生センターのセンター長からも祝辞や挨拶がありました。オープニングウィークには、これら5つのセンターや学生によるイベントが数多く開催されました。

ステューデント・コモンズ1階の談話スペース「カルチエ」には、「カフェゾーン」、組み合わせ自在な可動式机・椅子を配置した「自習ゾーン」、電子掲示板やソファーを設置した「情報ゾーン」があります。学生の主体的な学びの場、学生相互また学生と教職員の交流の場などとして利用されています。同じく1階の「開放型セミナー室」は映像シアターの設備を備え、全面ガラス戸を開放することにより中庭と一体化させて授業やイベントを開催することができます。2階には、マッチング型セミナー室など、さまざまなかたちのセミナーに対応可能な新しいタイプのセミナー室が整備されました。ステューデント・コモンズで大阪大学の全学的教育を担う5つのセンターが連携し、学生の主体的な活動が活発化することにより、大阪大学独自の教育が発展し、「教養」「デザイン力」「国際性」という教育目標が追及されていくことが期待されます。

なお、11月9日(月)の記念式典に先だち、大阪大学共通教育賞の表彰式が行われました。平成21年度第1学期分として、共通教育特別賞の下田正教授(理学研究科)をはじめ15名の教員が、優れた授業の実践などにより表彰されました。

高度教養教育の推進

大阪大学では、第２期中期目標期間に向けて、高度教養教育の推進を図っています。このたび全部局を対象に、高度教養教育についてのアンケートを、教育課程委員会を通じて実施しました。高度教養教育の意味や必要性、開講の可能性や問題点、学生による自主的エフォート管理という考え方などについて、各部局の意見を求めたものです。アンケートの結果に基づき、従来のワーキングを再編し、新たに設置予定の高度教養教育検討ワーキング（仮称）を中心に、教育・情報室で検討を続けていきます。

「就職支援システム」と「進路・就職報告システム」の運用開始

大学では、そこで学んだ人々、育った人々が、社会に出たあとどのような分野や場や位置で活躍することになるかがきわめて重要です。それによってその大学の意義や社会的貢献が決まる、と言っても過言ではありません。

学生支援の強化を図るため、就職について２種類のシステムを新たに構築し、10月1日(木)から運用を開始しました。大阪大学ホームページの「就職・進学情報」、またWebKOANの「就職」カテゴリーからログインすることができます。

①就職支援システム

過去３年間の就職内定状況（個人情報は含みません）をデータベース化し、学内の教職員と学生に公開します。また、就職活動に関連した様々な情報のほか、連絡掲示板や大阪大学学生と企業とを結ぶコミュニティサイトなどのサービスを提供しています。

②進路・就職報告システム

卒業・修了年次の学生が、進路・就職（内定）情報を入力により報告するシステムで、大阪大学における進路・就職状況をリアルタイムで把握することが可能です。（ログインは学生及び管理者のみに限定しています。）

②の進路・就職報告システムの情報は、①の就職支援システムの新たなデータとして蓄積され、後輩たちへの就職支援のため、また、各種統計調査のために活用されます。大学全体についても、また学部・研究科や専門など部分ごとについても解析することが可能です。

このシステムがより有効に機能し正しい情報を提供するためには、進路・就職状況について可能な限り正確なデータを得ることが必須になります。また大学の評価で就職は重要な指標であり、適切な大学評価を得るためにも必要です。各学部・研究科において進路・就職状況の体系的で網羅的な把握に努めていただくと同時に、各自がこのシステムに積極的に入力・報告し、先輩の入力によって自分が助けられたと同じように自分の入力が後輩を助けるという文化が生まれるよう、教職員の指導と学生諸君の協力をお願いします。

平成２１年度卒業式・学位記授与式

平成21年度の卒業式・学位記授与式は、以下の通り大阪城ホールで行われます。

日　時：平成22年3月23日(火)11時30分～
　　13時00分（入場完了11時00分）
場　所：大阪城ホール（大阪市中央区大阪城公園内）

本年度も昨年度と同様、学部生の卒業式と大学院修了者等の学位記授与式を一体化して執り行い、大阪大学経営協議会学外委員の方々にもご参列いただく予定です。父兄など同伴者の方々にも会場に入場していただきます。

次期学務情報システム導入プロジェクト

現在の学務情報システム（KOAN）は、平成23年9月でリース期間が終了する予定です。その後により優れたシステムを導入するために、「次期学務情報システム導入プロジェクト」が進行しています。現行のシステムを評価検討し、学生や教職員に対するアンケート調査や他大学のシステムの比較調査を実施してきました。小泉理事・副学長をプロジェクトリーダーとし、情報の側と学務の側の双方から教員と職員が集まり、より使いやすく適切かつ強力なシステムを導入するための検討を重ねています。学務上のニーズを十分に満たす情報システムとすると同時に、部局ごとに異なる学務手続きに修正を加え、学務と情報の双方向から全体調整を図る必要があります。とくに高度副プログラムや副専攻のように部局を横断する教育プログラムを学務情報システムで扱うには、成績入力期間を全学で統一することなどが条件となります。このため本プロジェクトでは、「学務関係業務のあるべき姿」と「現行システムの評価」の二つのグループで検討を行った上で、次期学務情報システムの仕様策定に入る予定です。

ソフトウェアの包括契約の開始

以前よりお知らせしてきたソフトウェアの包括契約が、平成22年1月から開始します。これにより、大学が管理する全てのPCに、WindowsOSの最新版へのバージョンアップや、MS-Officeのインストールが可能となります。また、教職員と全学生（正規生）は、個人が所有するPC1台に、同様のインストールとバージョンアップが可能となります。この契約により、大阪大学における情報環境の向上と標準化、教育環境の充実、e-Learningなど修学環境の整備、学生サービスの向上、経費節減、業務の簡素化、不正ソフト使用の防止と組織的コンプライアンスの確立、36言語に対応するソフトウェアによる国際化など、大きな効果が期待されます。

大阪大学が管理するPC（研究室及び教員等のPCと、事務情報ネットワークに接続されているPC）については、①大阪大学ポータルサイトからソフトウェア配付サーバに接続しダウンロードする方法と、②情報推進部からインストールメディアを貸出しインストールする方法があります。大学管理のPCへのインストールについては、ソフトウェア管理台帳に記載することにより厳密に管理します。

教職員や学生の個人所有のPCにインストールする場合は、①USBメモリにダウンロードし、自宅等でインストールする方法、②インストールメディアを購入しインストールする方法、③各キャンパスに設置するダウンロードブースで直接インストールする方法があります。大阪大学個人IDにより、同一ソフトウェアのインストールについて1人1台という制限を厳密に管理します。

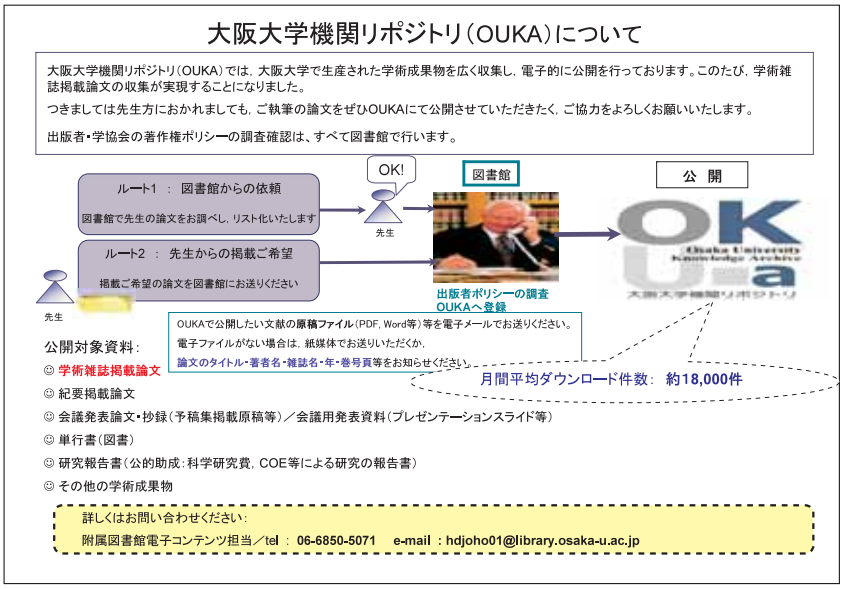
詳しくは情報推進部情報基盤課へお問い合わせください。教職員向けには大阪大学ポータル、学生向けにはKOANでも周知しています。なお、ソフトウェアの包括契約に関する情報提供ホームページを開設しましたので、以下のアドレスからご覧ください。
http://www.license.osaka-u.ac.jp/

大阪大学機関リポジトリ（OUKA）収録対象コンテンツの拡充

大阪大学機関リポジトリ（通称OUKA-Osaka University Knowledge Archive）は、大阪大学の知的生産物を電子的に保存し、原則として無償で発信するためサイバー空間に設けられた保存書庫です。大阪大学における教育研究上の成果を発信し、大学による知的成果への自由なアクセスを保証することで社会に対する説明責任を果たすとともに、知的生産物の長期保存という面でも大きな役割を担っています。現在のOUKAの収録対象は大阪大学の学位論文と紀要論文に限られており、登録件数は約1万5000件で急速に利用が拡大しています。研究成果の社会還元をさらに促進するため、学術論文全体（商業学術雑誌掲載論文を含む全種別コンテンツ）についても収録対象とすることが、教育・情報室、理事懇談会、部局長会議の議を経て承認されました。

このように、大学の知的成果を開放していく方向性は、学術情報流通における世界的なオープンアクセス運動（インターネット上で論文全文を公開し、無料で自由にアクセスできること）として推進されています。平成21年7月の文部科学省科学技術・学術審議会　学術情報基盤作業部会の「大学図書館の整備及び学術情報流通のあり方について（審議のまとめ）」においても、我が国の学術情報基盤強化のためにこの運動の推進が必要であるとされており、国立情報学研究所（NII）が機関リポジトリ構築支援事業を大学との連携により実施しています。

OUKAに論文を掲載するための手続きは、著作権関係を含めすべて附属図書館で行いますので、研究者には許諾だけをお願いすることになります。機関リポジトリによる社会への還元は、大学の評価の指標としても用いられ始めています。また、機関リポジトリの充実は、現在世界的な問題となっている電子ジャーナルの価格高騰に対して、中・長期的な抑制効果があると考えられています。研究者各位のご協力をお願いします。



研究・産学連携室

厚生労働科学研究における利益相反マネジメントを開始

本学では、平成22年度以降の厚生労働科学研究費（以下「厚労科研費」）に応募しようとする本学の教職員（研究代表者、研究分担者とも）等から「大阪大学利益相反マネジメント自己申告書（平成22年度厚生労働科学研究用）」（厚労科研費用自己申告書）の提出を求めることとしました。この利益相反マネジメントは、既設の利益相反管理委員会の下で実施されますが、「平成20年 大阪大学利益相反マネジメント自己申告書（第1次）」を提出済みの場合も、別途、厚労科研費用自己申告書を提出する必要があります。

厚生労働省は、公的研究である厚生労働科学研究の公正性、信頼性を確保するためには、利害関係が想定される企業等との関わり（利益相反）について適正に対応する必要があるとして、平成20年3月に「厚生労働科学研究における利益相反の管理に関する指針」を策定しました。この指針では、厚労科研費を受領する機関は、利益相反委員会を設置して利益相反管理を行う義務があり、そのための組織体制や内規の整備等に努めることとされ、利益相反マネジメントを実施していない機関は、平成22年度から厚労科研費の交付を受けることができないとされています。

本学では、この指針への対応として、今回新たな仕組みを導入することとなったものです。自己申告書の内容は、利益相反管理委員会にて審査され、必要がある場合は、ヒアリング、モニタリング、勧告が行われることとなります。

詳細については、http://www.osaka-u.ac.jp/ja/research/iinkai/coi/coi_10 をご覧ください。

知的財産権等の使用円滑化に関するガイドラインを制定

本学では、本学単独所有の知的財産権等について、他大学等での非営利目的の研究における使用や、リサーチツール特許等＊の使用に関して定めた「知的財産権等の使用円滑化に関するガイドライン」を制定しました。

このガイドラインは、総合科学技術会議の「大学等における政府資金を原資とする研究開発から生じた知的財産権についての研究ライセンスに関する指針」（平成18年5月23日）及び「ライフサイエンス分野におけるリサーチツール特許の使用の円滑化に関する指針」（平成19年3月1日）の趣旨を踏まえたもので、(1) 他大学等の非営利目的の研究に対しては本学単独所有の知的財産の権利行使をしないこと、(2) 本学で発明を行った研究者が異動先の他大学で自己の創作した知的財産（本学単独所有のもの）を研究使用する場合は権利行使しないこと等を定めています。

知的財産は、その創造、保護、活用を図ることによって、産学官連携や研究開発成果の事業化を促進し、イノベーションを通じてその成果を国民、社会に還元するための重要な役割を果たすものです。大学等は、知的財産権の権利者であると同時に、他者の権利の使用者でもあるので、知的財産権が、大学における研究の自由と、研究者の流動性を阻害しないよう、権利者と使用者の双方の立場から知的財産権の管理や活用を図ることが必要とされます。

詳細については、http://www.uic.osaka-u.ac.jp/download/download.php?file=enkatsuka-guideline.pdf をご覧ください。

＊このガイドラインでは、ライフサイエンス分野において研究を行うための道具として使用される物又は方法に関する日本特許をいう。（例：実験用動植物、細胞株、スクリーニング方法などに関する特許）

評価室

20年度に係る業務の実績に関する評価結果の公表

各国立大学法人の平成20年度の年度評価結果が国立大学法人評価委員会から公表されました。

大阪大学では、これまでの教育研究の質の向上と業務運営の改善に積極的に取り組んだ結果、「業務運営の改善・効率化」、「財務内容の改善」、「自己点検・評価及び情報提供」、「その他の業務運営に関する重要事項」のすべての事項について「中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる」との評価を受けました。

なお、平成19年度評価結果で課題と指摘された事項については、適切に対応しているとの評価を得ました。

平成21年度は第一期中期目標期間の最終年度であります。今一度、大学全体として各計画の完全遂行に努めていただきますようお願いいたします。

また、各部局におかれましては、業務実績報告の作成にご協力いただき大変にありがとうございました。

同評価結果については、ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

（大学HPアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/files_hyouka/hyouka_h20）

【評価結果抜粋】

1　全体評価

大阪大学は、教育・研究・社会貢献を通して国民と社会の信託に応えることにより、「地域に生き世界に伸びる」という理念の実現に向けての取組を積み重ね、業務運営、教育研究等のさらなる推進に取り組んでいる。

業務運営については、今後の中長期的な大学運営の方向性を示す「大阪大学グラウンドプラン」及びその取組を示す「大阪大学活動方針2008」を策定し、戦略的な運営に取り組んでいる。また、全学及び部局の産学官連携問題委員会の見直しを行い、運営のスリム化を図っている。

財務内容については、補助金等の事業執行に際して教員個人の負担を軽減し、研究の円滑な進展に寄与するため研究資金立替制度を有効活用している。また、複写機契約の随意契約から一般競争入札による総合複写業務支援サービス契約への見直し等により大幅な経費等の節減と業務の軽減が期待される。

自己点検・評価及び情報提供については、概算要求に係る学内ヒアリングにおいて、達成状況評価の結果と各部局の特記事項及び留意事項を参考資料として有効に活用している。

環境への取組については、付近住民に開かれたキャンパス整備を行っており、財団法人都市緑化基金から第19回「緑のデザイン賞」緑化大賞を授与されている。

教育研究の質の向上については、大学院生を対象とした大学院高度副プログラムを開始している。また、産学連携推進本部による技術移転、共同研究等の推進等により新たな共同研究講座の設置や、次世代照明デバイス等の大型の共同研究が拡大するなど効果が現れている。

2　項目別評価

(1) 業務運営の改善及び効率化	4
(2) 財務内容の改善	4
(3) 自己点検・評価及び情報提供	4
(4) その他業務運営に関する重要事項	4

5：特筆すべき進捗状況にある
4：順調に進んでいる
3：おおむね順調に進んでいる
2：やや遅れている
1：重大な改善事項がある

財務室

平成２１年度予算補正（第１次）

財務室において策定した平成21年度予算補正（第1次）案が、11月24日の役員会で承認されました。

その概要は、年度当初の収入見込額（当初収入予算額）に比して、約14億円の増収が見込まれ、当該増収に伴い必要となる診療経費を追加して措置するなど、補正を行ったものであります。

平成２１年度教育研究等重点推進経費の執行計画について

「教育研究等重点推進経費」の第2次執行計画（案）が11月24日の役員会で承認されました。

採択事業は以下のとおりです。

部　局　名　等	事　　項　　名
研究・産学連携室	競争的資金獲得等支援経費

資金運用について

資金運用ワーキング・グループでは、資金需要を考慮した適切な運用金額、運用期間及び運用形態を検討し、長期・短期の資金運用の組み合わせによる効率的な余裕資金の運用を行なっております。

平成21年10月期・11月期においても新たな短期資金運用計画を策定し、積極的な運用を行っており、今年度においては、11月末現在で、約1億3千万円を越える運用益を見込んでいます。

人事労務室

特例職員制度の導入について

本学では、法人化後における新たな業務量の増加、外部資金の獲得によるプロジェクト等の増加、及び教育研究支援体制強化の必要性の増大等による新たな業務等への対応は喫緊の課題となっております。

このたび、これらの課題に対応し、本学の更なる発展を期することを目的として、退職手当を支給せず、特別賞与を支給する任期の定めのない常勤職員（事務職員及び技術職員）を雇用することができる人事制度を設け、以下のとおり、平成22年度から特例職員制度を導入することとなりました。

この特例職員制度は、一般的な制度として設けるものですが、今後、平成26年度までの5年間については、まずは法人化前から在職している事務補佐員及び技術補佐員を中心として特例職員採用試験を実施し、適任者を採用したいと考えております。

特例職員制度の概略

(1) 退職時に退職手当を支給せず、その代わりに毎年の賞与の支給時期に特別賞与として一定額を支給する任期の定めのない（60歳定年制）常勤職員（事務職員及び技術職員）の制度を設ける。

(2) 基本給・諸手当、昇給、昇任等は、これまでの任期の定めのない常勤職員と同様に取り扱う。

ただし、一定の条件（現時点では未定）の下に、退職手当支給の任期の定めのない職員へ移行することができることとする。

(3) 採用にあたっては、その者のキャリア・業務知識等をはかるため、教養試験の他に、小論文試験、及び面接を行う。学内からの採用の場合は、さらに元所属部局からの推薦を加え、小論文試験や面接を重視したものとする。（経験者を重点的に雇用する。）

(4) 任期の定めのない職員であるため、人事異動が行われる職員とする。

勤務時間短縮の試行的実施について

平成21年4月から、国家公務員の勤務時間は1日7時間45分、1週38時間45分となりました。

本学では、平成21年4月からは勤務時間の短縮（以下「時短」という。）を実施せず、政府方針である「行政コストの増加（人件費の増大）を伴わずに時短を実施すること」を念頭に、その方策について実施の可否を含めて検討してきました。

その結果、現状では、時短の実施が時間外労働時間の増加（人件費の増加）を招く恐れが高いという結論に至りました。このため、コストの増大（人件費の増大）につながらない形で1日15分の時短を行うための方策を講じ、それを確立することを目指して、試行を行うこととしました。

試行の概要は以下のとおりで、平成22年4月から試行に入ることとし、今後実施部局の選定等を行うこととしています。

時短の試行的実施の内容

(1) 試行的実施の方法

原則として、「勤務を命じない時間」を昼休み等の時間帯に設けることとする。

(2) 試行的実施部局の構成

学生・患者サービスを行う部署を含めて試行実施部局のバランス（本部事務機構（部単位）・研究科、研究所・病院・学内共同教育研究施設等）を考慮して決定する。

(3) 検証期間

1年間とする。

(4) 今後の具体的な手続き及び実施予定時期

①業務効率化又は労働時間の有効利用に関するアイデアを学内に示す。

②試行実施希望部局を募る。

（応募時に、時短実施プラン（仮称）（具体的な計画及び超過勤務時間の年間削減目標数値等を記載したもの）を併せて提出）

③実現性が高いプランを掲げた部局の中から、上記（2）を考慮した上で、試行実施部局として決定する。

(5) 検証

試行結果を分析し、必要な対応策を講じて、時短を実施する。

広報・社学連携室

私が理事になりまして2ヶ月すぎました。現在、最も重要な課題として検討していますことは、広報についてです。

広報は、部局や大学の活動を学内外に発信してゆくわけですが、有効な広報を考えていかなければなりません。学内に向けては、大学の動きを大学構成員に迅速かつ正確に伝えてゆくこと、学外に向けては、学外の方が使える形で広報してゆくことが重要と考えています。

まずすぐに始めることとして、各室の活動状況を迅速に伝えることで、大学のホームページに、各室の活動報告や担当理事（室長）からの一言の欄を設けたいと考えています。また、大学の動きを直接構成員の皆様に迅速かつ正確にお伝えする方策を検討しています。また、学外に向けては、プレストの関係を密にする方策を検討しています。

21世紀懐徳堂では、部局の行っている公開講座などの社学連携活動を21世紀懐徳堂のホームページに掲載し、社会の人にとって大阪大学の社学連携活動の全容を見ることができるよう努力していきます。

これらの活動を有機的に効果的に行うためには部局の協力がキーとなります。どうかご協力よろしくお願いします。

O＋PUSの全学設置が完了

学内構成員のコミュニケーション活性化とイメージリテラシー教育の充実をはかるため本年6月から運用を開始した「O＋PUS（Osaka university and Panasonic Universal Sight)」が、耐震改修工事完了に伴いステューデントコモンズと大学実践センター講義棟ピロティーに設置されました。　これにより、当初の計画どおり学内の14カ所への設置が完了し、より多くの学生・教職員に対する情報発信システムが完成しました。

今後は、告知情報のほか、学生のチカラを活用した新しいコンテンツの開発も推進していきます。

ステューデントコモンズ

大学実践センターピロティ

OSAKA光のルネサンス2009に参加

中之島を会場にして行われる「OSAKA 光のルネサンス2009」（2009年12月12日～25日）に、大阪大学中之島センターが今年も参加することになりました。

このイベントは、社学連携事業の一環と位置づけ、「中之島まちみらい協議会」に属する中之島センターが、中之島地区の活性化と本学の社学連携の拠点として広く社会へアピールすることを目的に、昨年から参加しているものです。

今年は、本学学生の協力も得ながら、センター東面の壁面全体を使用し、窓の内側に設置したLEDイルミネーションにより、上から下に流れるシューティングドロップが「降り積もる雪」を表現します。また、本事業の中心企業でもある関西電力(株)のご協力を得て、「社学連携による光のまちづくり　デジタル・ウォール・アート」を実施します。これは、「知の交流拠点」である中之島センターのより身近で社会に開かれた「姿」をデジタル・ウォール・アートで表現してゆきます。デジタル・ウォール・アートは、縦長の壁面をキャンバスに見立て、さまざまなデジタルコンテンツ「万華鏡」により光による新しい景観を生み出してゆきます。

また、期間中、この「光のルネサンス2009」に連動して、中之島センター1階において「夢灯りコンサート」を開催します。大阪大学の学生サークルの皆さんが、クラシック室内楽やジャズの軽快な音色で冬の中之島を包みます。大阪のまちと市民と大学をつなぐ大きな事業です。

国際交流室

上海教育研究センターの設置

標記センターの設置が11月の教育研究評議会ならびに役員会で承認され、本学第4番目の海外拠点設置が決定しました。

大阪大学の海外教育研究センター：既にご承知のように大阪大学は平成16年4月から以下の3つの海外教育研究センターを順次開設してきました。これらのセンターは、「世界に伸びる」大阪大学の国際化基本方針における組織的整備の大枠に沿ったもので、教育研究の先進的・発展的地域において、本学の教育・研究両面での前進中継基地（ハブ）となり、緊密な人的ネットワークを構築するとともに、学生・研究者の国際交流の実質的推進を図ることを目的としています。

サンフランシスコ教育研究センターは、他大学に先駆け遠隔講義（2科目）を企画しました。これらは共通教育科目として毎年実施され、多くの受講者を得ています。また、部局で企画された研修プログラムの現地支援を行っているほか、主としてカリフォルニア大学各キャンパスとの間で構築した人的ネットワークを活用し、新たな研修プログラムの企画（理学・歯学研究科）を全面的に支援し成功させています。

グローニンゲン教育研究センターは、グローニンゲン大学との交流の基礎固めを行うとともにその飛躍的推進に成功し、その結果として、例えば欧州連合のエラスムスムンドゥス・プログラムへの参加（本学は3件）や、EU／日本共同実施の学生交流プログラムであるICI－ECPへの採択（本学は2件）を実現させています。

バンコク教育研究センターは、タイ王国内の著名大学との交流を深めるとともに、東南アジア諸国の協定締結校との人的ネットワーク形成に成功し、これらの大学の副学長をバンコクに招聘して副学長会議を開催し好評を得ました。また、GLOCOLの連絡事務所としての機能も果たしています。

また、これら3拠点はいずれも新しい短期受入れプログラム「FrontierLab@OaskaU」への学生リクルートに成功しています。これにより今後、留学生のリクルートが拠点のもっとも重要なミッションとなり、そこに力を発揮することは間違いありません。

上海への新たな設置：以上のように、本学が交流を積極的に進めるべき北米、東南アジア、欧州各地域における本学のハブが実現しつつありますが、巨大な学生数を擁し、飛躍的に発展している中国には、いまだ拠点がなく、他の有力大学に遅れをとった感が否めませんでした。そこで、国際交流室では、「中国拠点設置準備室」を置き、鋭意検討してきましたが、拠点の設置は、交流の加速的促進のために必要かつ有効であり、その場所として上海が最適であるとの結論に達しました。その理由は以下の通りです。

1）上海及びその周辺に、大学間交流協定のある上海交通大学、復旦大学、南京大学、浙江大学の他、多数の部局間交流協定校が存在すること。
2）特に上海交通大学は、平成7年以来、学術セミナーを毎年交互に開催しており、平成20年12月には大規模な留学フェアを同大学で開催するなど長年の交流実績を有しているため、中国の他地域へのゲートウェイとしての役割を期待できること。
3）大阪府・大阪市と上海市との間には姉妹都市協定があり、ともに上海事務所を設置している。また、本学は大阪市との間に包括協定を締結しており、親密な相互協力関係を構築していること。
4）大阪大学上海同窓会及び咲耶会（旧大阪外国語大学同窓会）上海支部の活動実績、さらに日本企業も多く進出しており、こうした同窓生・企業との多様な連携・支援が期待できること。
5）上海は中国国内における交通のハブであり、大阪からの交通も至便であること。

中国からの留学生は現在433名で全体1,455名のうち約40%を占めていますが、日本全体での割合が60%を超えていることを考えるとむしろ少ないのが現状です。中国においては、すでに日本の約40の大学・研究機関が海外拠点を設置しており活発な留学生リクルート活動を展開しており、中国の大学との学生交流の加速的推進は本学にとって極めて重要な喫緊の課題であると言えます。

以上の4拠点の整備により、法人化当初から計画していた本部直轄海外拠点の整備は一通り完了することになります。今後、このセンターを通して中国との学生・研究者交流を一層進めてゆきたいと考えます。是非既設のセンターとともにご活用下さい。

創立８０周年記念事業

大阪大学は２０１１年に創立８０周年を迎えます

原点へ・未来へ

創立８０周年記念事業委員会及び実行委員会の設置

本学は、昭和６年（1931年）に大阪帝国大学として創設以来、適塾を原点とし、さらに遡って懐徳堂の精神を汲みつつ、我が国を代表する総合大学の一つとして発展し、多彩な教育研究活動を展開しています。また、平成19年（2007年）10月に大阪外国語大学と統合し、総合大学としてさらに発展を重ね、平成23年（2011年）に創立80周年の節目となる記念すべき年を迎えることとなります。

本学では創立80周年を記念する事業を実施することとし、その事業に関しては大阪大学と大阪外国語大学との統合後はじめての周年事業であることを考慮しつつ、創立80周年記念事業の主テーマ及び事業の具体的な内容を検討することとしました。そこで、創立80周年記念事業を企画し、その実施に関する基本的な方針を審議することを目的として、大阪大学創立80周年記念事業委員会及び実行委員会を設置しました。

記念事業委員会

構　　成：総長、理事・副学長、各部局長等（部局長会議メンバー）
委 員 長：鷲田総長
副委員長：西尾理事・副学長
業　　務：創立80周年を記念する事業を企画し、及びその実施に関する基本的な方針を審議する。

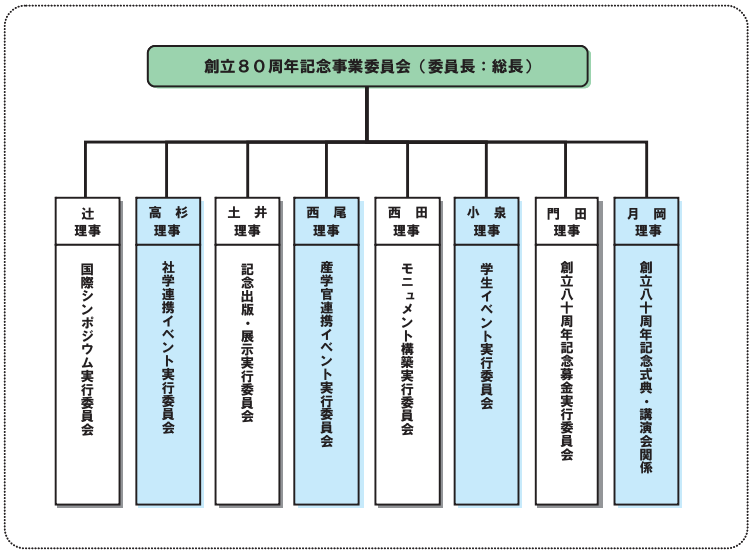
実行委員会

各種事業を企画、立案及び運営に関し必要な事項の審議並びにその実施に当たるため、記念事業委員会の下に各実行委員会を設置する。各実行委員会の委員長には各理事・副学長が当たる。

【実行委員会】

(1) 国際シンポジウム実行委員会
(2) 社学連携イベント実行委員会
(3) 記念出版・展示実行委員会
(4) 産学官連携イベント実行委員会
(5) モニュメント構築実行委員会
(6) 学生イベント実行委員会
(7) 創立80周年記念募金実行委員会
(8) 創立80周年記念式典・講演会関係

実施組織



記念事業

学内の重要な記念行事や公開講座などで創立80周年記念事業と連動して開催可能な場合は、本事業の一環として行い、事業を盛り上げるとともに効率化と経費削減を図ります。例えば、緒方洪庵生誕200周年記念行事、懐徳堂記念会創立100周年記念事業については、既に創立80周年記念事業のプレイベントとして開催することとしています。

委員会では創立80周年を迎える年を「創立80周年記念YEAR」とし、委員会の下におかれた実行委員会等から提案のあった様々な記念事業を、年間を通じて実施することとしています。さらに「創立80周年記念YEAR」の前年には、創立80周年のプレイベントとして、展示やシンポジウムも予定されています。

〔主な事業〕

平成２１年１２月１６日現在

実行委員会等	事　業　案
国際シンポジウム実行委員会	◇創立８０周年記念国際シンポジウム・シリーズ
社学連携イベント実行委員会	◇創立８０周年記念行事広報関係
	◇２１世紀懐徳堂講座
	◆司馬遼太郎記念学術講演会
	◆ホームカミングデイ（第６回）
	◆ホームカミングデイ IN TOKYO（大阪大学卒業生の集い）
	◆２１世紀懐徳堂シンポジウム
	◆適塾特別展
	◆適塾記念講演会
	◆天神祭船渡御「阪大船」
	◆創立80周年共催事業（プレイベント） ・緒方洪庵生誕200周年記念事業（総合学術博物館、医学部・医学系研究科・連携事業）
記念出版・展示実行委員会	◇記念アルバム「Green Campus」（仮称）刊行
	◇情報発信本「ときめきサイエンス」(仮称)刊行
	◇創立80周年共催事業 ・展覧会・シンポジウム等「手塚治虫と大阪大学」(仮称)（総合学術博物館・共催事業）
	◆創立80周年協賛事業：2011年度博物館秋季企画展 ・脳と情報ーこのあやふやなもの？（総合学術博物館・協賛事業）
産学官連携イベント実行委員会	◇プレジデント・サミットの開催
	◇大阪市との連携イベントの開催 ①大阪イノベーションサミット：ソーシャルイノベーションを目指して（仮称） ②次世代イノベーティブテクノロジーマッチングイベント（仮称） ③ロボカップジャパンオープン2011大阪（仮称）
	◇産業界との連携のあゆみ・あしたへの夢
モニュメント構築実行委員会	◇銅像設置(旧制大阪高等学校同窓会寄贈)[青春の像]
	◇銅像設置(旧制浪速高等学校同窓会寄贈)[高下駄、黒マントの当時の学生の風貌を再現した銅像]
	◇大阪大学会館整備(関連事業を含む。)
学生イベント実行委員会	◇創立８０周年記念大学祭シリーズ(一部は中之島センター周辺で開催)
	◇創立８０周年課外研究奨励費(80周年記念事業として採択課題件数を増加)
	◇中之島ウォークラリー大会
	◇創立８０周年課外活動奨励費
	◇世界に広がる大阪大学同窓会ネットワーク
	◇学生企画による創立８０周年記念広報事業 ①中之島センター創立８０周年イルミネーション ②創立８０周年記念ペイント
	◇学生支援に対する感謝状贈呈式
	◇学生による高校生のための大学紹介
	◇オーパス映像コンテスト
創立８０周年記念募金実行委員会	◇創立８０周年記念事業の募金活動企画・立案・運営等
創立80周年記念式典･講演会関係	◇記念式典
	◇記念祝賀会
	◇記念講演会(司馬遼太郎記念学術講演会)

“◇”創立80周年記念事業として新たに実施するもの
“◆”例年実施している事業を創立80周年記念事業として実施するもの又は他の共催･協賛して実施するもの

記念事業タイトル

記念事業委員会では創立80周年を迎えるにあたり、記念事業タイトル「原点へ・未来へ」を制定しました。

“原点へ”は、本学の精神的な源流である適塾と懐徳堂がともにめざした科学的精神とそれにもとづく徹底して合理的な知を追求すること、あわせて深い徳と豊かな教養を磨くという希有な原点を今、あらためて思い起こすことを表し、“未来へ”は、「社会に開かれた学府」として「地域に生き世界に伸びる」というモットーのもと未来志向の産学連携、社学連携、地域の文化機関、国際的な文化機関として、大阪大学の役割を担い、「阪大ならでは」の特色ある活動と運営スタイルを築きあげてゆくということを表しています。

原点へ・未来へ

【原点へ】

◇ 大阪大学は、昭和6年（1931年）に大阪帝国大学として創設され、江戸期に大坂の地に創設された適塾（1838年）を原点とし、さらに遡って大坂の五商人によって開設された懐徳堂（1724年）の精神を汲みつつ、学術と教育の機関として発展してきた。

◇ 藩校ではない市民による市民のための二つの学問所を精神的な源流としており、そのことを大きな誇りとしている。科学的精神とそれにもとづく徹底して合理的な知を追究すること、あわせて深い徳と豊かな教養を磨くこと。

◇ この二つをともにめざした適塾と懐徳堂の精神という希有な原点を、大阪大学はいまあらためて思い起こし、それを現代にふさわしく大きく飛躍させてゆかなければならない。

◇ 大阪大学のもう一方の礎である大阪外国語大学は、大正10年(1921年)、大阪の実業家・林蝶子女史(1873-1945)が「大阪に国際人を育てる学校を」という理念のもとに、学校設置資金として、私財100万円を国家に寄付されたことに遡る。平成23年（2011年）は、大阪外国語大学の創立90周年の年でもある。大阪外国語大学の建学の精神のもと、大阪大学はさらなる国際化を図ってゆかなければならない。

【未来へ】

◇ このように「社会に開かれた学府」としての大阪大学は、「地域に生き世界に伸びる」というモットーの意義を再認識し、グラウンドプランのもと、その使命を果たしてゆく。

◇ 在阪企業との産学連携事業、21世紀懐徳堂をはじめとする社学連携事業、さらには地域の文化機関、国際的な文化機関としての大学の役割を積極的に果たしていくために、阪大の創設の地である「中之島」への回帰を図る。そしてその再開発計画に積極的に関与してゆく。大阪大学のみならず、大阪というまちが魅力的でなければ、全国からほんとうに優秀な学生は集められない。

◇ 世界トップレベル研究拠点プログラム、グローバル30プログラムを契機として、さらなるグローバル化を図り、世界最高レベルの研究拠点大学としての大阪大学の国際的なプレゼンスを高める。

◇ 創立80周年を迎え、原点を見据え、さらなる広がりをめざす大阪大学の未来を表現するセレモニー、記念講演、記念シンポジウム等を中之島を中心に開催する。

ロゴ・マーク、バナー

創立80周年記念事業委員会では、学内の気運を盛り上げるため、創立80周年記念のロゴ・マークを下記のとおり制定しました。

ロゴ・マークの制作については、学章をモチーフに、創立80周年の記念事業タイトル「原点へ・未来へ」をふまえ、21世紀懐徳堂の特任研究員 荒木基次 氏をはじめとする「80周年ロゴ・マーク」制作チームに作成を願ったものです。

今後、創立80周年記念事業が終了するまでの間、ロゴ・マークを機会あるごとに積極的に使用し、創立80周年をアピールしていきます。また、バナーについては、本部事務機構共通棟、コンベンションセンター、中之島センター等に設置しています。

■ロゴ・マーク

（基本形態・基本色）

■バナー

・制作者

「80周年ロゴ・マーク」制作チーム
荒木　基次（大阪大学21世紀懐徳堂・特任研究員）
久保田　徹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・特任講師）
八木　良太（大阪大学ウェブデザインユニット・ 特任研究員）

・制作意図

全体的なモチーフは黄金比率の「祝祭の旗」であり、基本的な色彩は「祝いの紅白」とした。

「80」の数字が入った白い三角形の空間は、記念事業タイトルの「原点へ・未来へ」をふまえ、「原点へ＝集中する」方向性と「未来へ＝拡大する」方向性を表している。

それに伴い「th ANNIVERSARY」の文字は「原点」にも「未来」にもフレキシブルに対応する意味を込めて、ファスナーの取手のようにレイアウトした。

また、映像動画での情報発信にも対応させるため、動きを創りだせるデザインも意識している。同じく学内の意識を喚起するため「バナー（＝垂れ幕）」などとしてキャンパス内に「翻る」ことも想定している。

大阪大学会館

この記念すべき創立80周年を契機として、本学の「原点」の一つである旧制浪速高等学校の校舎（豊中キャンパスの共通教育本館（イ号館：登録有形文化財建造物））を阪大人の共通の思いを託せる施設として、さらには大阪における学術の伝統のシンボルとして「大阪大学会館」に再開発することを計画しています。懐徳堂、適塾といった原点を意識し、大阪大学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」のもとで、未来志向の社学連携、産学連携、国際連携などのさまざまな活動に資する拠点として、この会館を設置することにしています。

“原点”を見据え、さらなる広がりをめざす大阪大学の“未来”を表現する創立80周年記念事業を中之島を中心に開催することとしています。

本学の学生・教職員はもとより地域社会の方々も含め、幅広く創立80周年記念事業にご参加いただけるよう検討を進めますので、ご支援・ご協力をお願いします。

大阪大学未来基金（大学）について

大阪大学総長補佐（基金・広報担当）
山　元　　弘

本年５月に「大阪大学未来基金（大学）」が創設されました。既に募金活動は開始しているところですが、一層その趣旨へのご理解・ご協力をいただきたく、改めて、この基金を紹介いたします。

■ 大阪大学未来基金（大学）とは

大阪大学の基本理念「地域に生き世界に伸びる」のもと、大阪大学が独自の事業を継続・発展させるためには、一定規模の自主的な財源を恒常的に確保しておくことが不可欠です。そうした自主財源を確立するために、財務基盤整備本部ならびに財務室基金検討ワーキングにおいて、おおよそ２年間にわたり、国立大学や私立大学の活動の状況を調査するとともに、慎重な議論を重ね、本年５月、「大阪大学未来基金（大学）」が設置され、募金活動が始まりました。

■ 活動の基本方針

・基金の規模と目標

右の表にもありますようにアメリカの大学では1000億円を超える基金をもつ大学も多くあり、また他の日本の国立大学でも一定規模の基金を持っています。こうしたことからも、５年間で100億円規模の基金を確立したいと考えています。基金は、一定額を確保するまでは原則として安全な資金運用による運用益のみの使用とします。しかし募金活動の初期段階や、時勢に即応した緊急性のあるプロジェクトについては、ある程度元本を使用することもやむを得ないと考えています。

・募金の目的と基金の使途

包括的な使途を目的に掲げて募金を行いますが、寄附者の皆様の意向を可能な限り反映できるように個別の使途目的や種々の要望などにも対応するようにし、寄附者の皆様に対してはきめ細かく配慮・対応すべく柔軟に運営します。

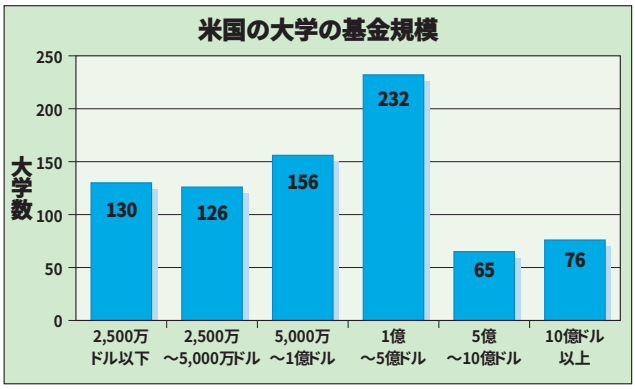
・募金の対象

大阪大学未来基金（大学）は、個人寄附型とともに、企業・団体などを対象とした組織寄附型を併設します。当分の間は本学教職員、卒業生や大学関係者など広く個人を対象に募集します。しかし、「まず魁より始めよ」の諺にあるように、本学教職員が率先して募金を行うことによって、本基金創設にかける大学スタッフの熱意や意気込みを示すことが第一歩です。それに続いて卒業生、さらには企業・団体などを対象とした募金活動を展開します。個人寄附を重視するのは、アメリカの大学や日本の有力私学が卒業生や大学関係者を募集の相手とする寄附金が主流であることを参考にしたためです。いわば「阪大ファンクラブ」の創生であり、したがって継続的な寄附を促すためのフォローアップ（謝辞、顕彰）や情報を公表することを重視します。

・募集の主体

募金活動を進める組織として、大学に基金室及び基金事務室を設けその業務を担当しています。ここには募金活動を専門とする専任教員と、事務職員を配置しています。

これまで、大学外組織としての大阪大学後援会による「未来基金」が募集されています。公益法人に関わる法制の改正に伴い後援会組織の改組が検討されていることを踏まえつつ、将来は後援会の「未来基金」と合流し、大学が募金活動の主体となり、大学が責任をもって独自財源の確立をはかって行きたいと考えています。

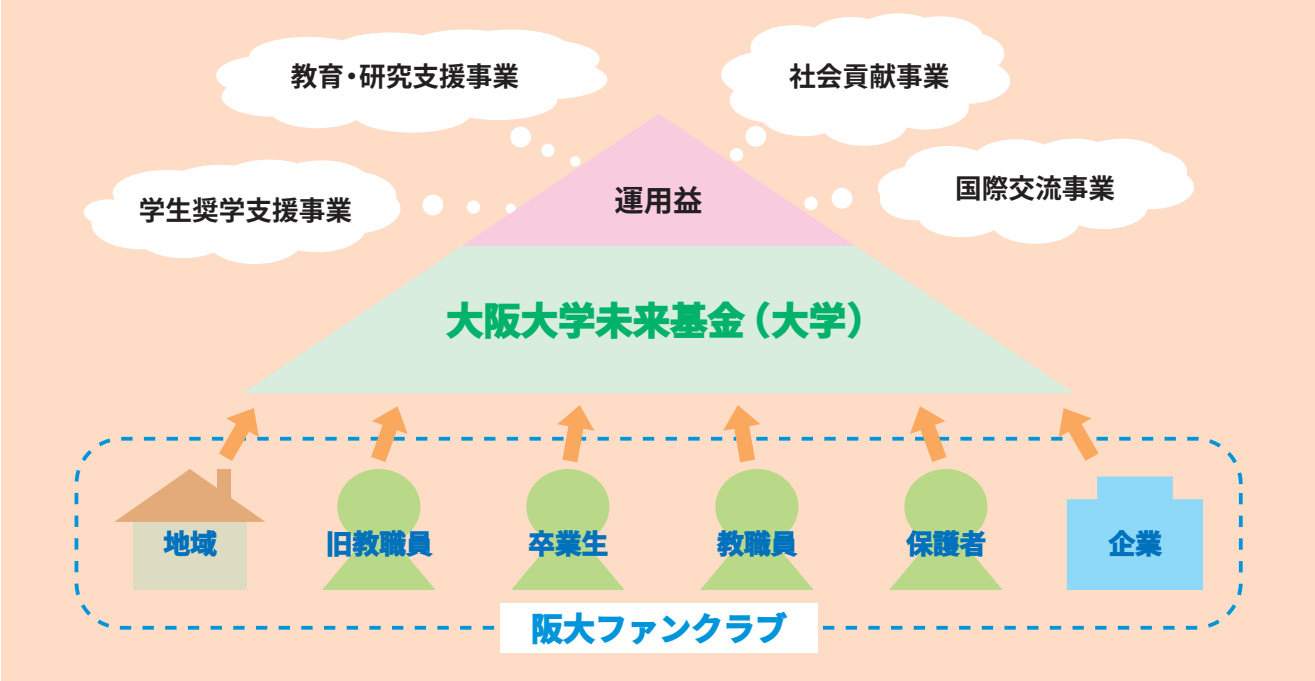


日本の大学の基金の状況

大学	募金残高
北海道大学	13億円
東京大学	195億円
一橋大学	22億円
名古屋大学	11億円
神戸大学	18億円
九州大学	22億円

上表：【出所】文部科学省先導的大学改革推進委託事業「大学の資金調達・運用に関わる学内ルール・学内体制の在り方に関する調査研究」東京大学より（アンケートに回答した785の大学のうち47.5%にあたる373校が１億ドル以上の基金を保有している。）

左表：【出所】各大学HP



■ 部局等が行う独自の募金活動との関連

各部局ではこれまで、それぞれの周年事業などの募金活動を実施してきました。しかし往々にして複数の募金活動が重なり、相手方にとっては、同じ大学から種々の寄附依頼がくるという、いわゆる「ダブルアスキング」の状態が生じていました。こうした社会一般常識にそぐわない状態を避けるために、部局等の募金事業は「大阪大学未来基金（大学）」に一本化することを考えています。個別の募金活動への醵金は、寄附者が使用目的を指定することで目的を明確にしていただきます。現在、「大阪大学における教育、研究、社会貢献、国際交流への支援」を使途とした募金と、並行して「大阪大学創立80周年記念事業」と「洪庵生誕200周年記念事業」を使用目的とした募金活動を進めています。これらの募金事業と連携することによって、ダブルアスキングを避けた募金活動を行っているところです。

また、創立80周年記念事業の一環として、近々「大阪大学会館設立募金」活動が開始されますが、これは個人寄附型ではなくて企業・団体などを対象としたものとする予定です。先の「大阪大学創立80周年記念事業」への募金（記念諸事業へ対応）とは性質を異にしたものです。

■ 基金の活用計画と現状

使途を限定した募金活動を除いて、基金は「教育、研究、社会貢献、国際交流への支援」を目的としてあげていますが、将来は米国の大学のように奨学支援などもその目的に盛り込みたいと考えています。

平成21年11月末現在、1億円強の募金が集まっています。本学の教職員と一部卒業生や旧教職員からの醵金の他に、ある卒業生の方からは、ご自身の相続財産から多額のご寄附をいただきました。大学としては、こうした事例を踏まえ、大阪大学へのこの種の寄附を考えて下さっている方に対して、相続に係る法律やその手続などについて、相談の窓口を設けております。

基金の充実のために、改めて本学教職員各位のご支援を心からお願いたします。

税法上の優遇措置について

大阪大学未来基金（大学）にご寄附いただいた個人の皆様は、下記のとおり税法上の優遇措置を受けることができます。

【所得税】寄附金額（年間総所得額の40%を限度とする）から5,000円引いた額が当該年の所得から控除できます。

【住民税】大阪大学への寄附金を個人住民税の控除対象としている都道府県・市区町村（例えば吹田市や豊中市）にお住まいの方は寄附金控除を受けることができます。控除額や大阪大学への寄附がこの対象とされているかなどは、お手数ですが各自治体の税務の窓口にお問い合わせください。

大阪大学未来基金（大学）について
お気軽にお問い合わせ下さい

大阪大学基金事務室
TEL：06 － 6879 － 8327　FAX：06 － 6879 － 4337
E-mail： kikin@ns.jim.osaka-u.ac.jp　http://www.osaka-u.ac.jp/kikin/

学生支援GP「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」合宿研修

学生部キャリア支援課では、平成19年度文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択された「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムを平成19年度から実施しています。

平成21年度は8月から9月にかけ、各学年（4年次はメンターとしての参加）を対象とした合宿研修を3泊4日の日程で3回行いました。

1年次では「世界と日本そして市民としての私（取り巻く環境の課題認識と世界と自己との関係性の構築）」、2年次では「市民との対話と協創（コラボレーション技術とソーシャル・ネットワーク形成の習得）」、3年次では「市民社会変革型リーダーの使命と役割（市民社会でのリーダーとしての志（Aspiration）・信念（Belief）・コミットメント（Commitment）の形成と実践）」というテーマをもとに、学内外の様々な分野の講師を迎え、学生部職員による運営のもとにグループワークを中心としたセッションを実施しました。参加学生諸君が合宿研修での経験を今後の学生生活に活かし、市民社会でのコアとなる人材に育っていくことを期待しています。

あるセッションでのグループワーク

ストーリーテリングによる「総括」

学生支援GPの合宿研修の報告やその他の活動については、ウェブページ（http://www.osaka-u.ac.jp/jp/campus/leadership_GP/index.htm）に掲載しています。

（学生部キャリア支援課）

大阪大学技術職員研修（第２６回）実施

大阪大学技術職員研修（第26回）が、9月2日(水)、3日(木)の両日にコンベンションセンターにおいて行われました。

この研修は、本学技術職員に対し、職務に関する必要な知識・技術等を広く修得させるとともに、自己啓発、相互啓発の機会を与えることにより、職員の資質の向上を図ることを目的として実施されたものであり、当該研修には、10部局から27名の技術職員が受講しました。

開講式では、鷲田清一総長から本学職員としてその社会的責任を一丸となって果たしていただきたい旨、激励の言葉がありました。その後、安全衛生管理部　富田賢吾　講師から「大学・職場における安全衛生に対する技術職員の役割」の講義、工学研究科　赤松史光　教授から「化石燃料の燃焼とエネルギー・環境問題」の講義、引き続き、技術職員講演が行われました。

鷲田総長

フィッシュボーン演習

2日目は技術職員講演の後、安全衛生管理部　山田　等　特任研究員から「巡視を通じて技術職員に求める安全・衛生への取り組み」の講義、活動経営塾　村杉政一　塾長から「自動車づくりから得た大学で求められる技術者像」の講義、引き続き、安全技術演習・フィッシュボーン演習では班別討議を行った後、各班により発表が行われました。閉講式では月岡理事・副学長から修了証書の授与が行われ、2日にわたる研修を修了しました。

（総務部人事課）

中国天津大学材料科学及工程学院との学術交流協定に調印

接合科学研究所は、9月18日(金)に天津大学材料科学及工程学院と学術交流協定に調印しました。調印式は天津大学で行われ、中田一博所長と田中学教授が出席されました。今後、両校との間でセミナーや共同研究、ならびに教員、大学院生との積極的な交流を図ると供に、これまでに締結した海外大学・研究機関との連携を通じて、溶接・接合科学に関する国際的な学術研究拠点ネットワークの形成を目指していきます。

なお、調印式に先立ってYaochang Liu天津大学副学長から中田所長に天津大学Guest Professor（任期2009年～2011年）の招聘書が授与されました。

調印式

Guest Professor授与

（接合科学研究所）

ベトナム派遣団訪問記（ハノイ、ホーチミン、ダナン）

グローバル30プログラムの一環として世界の大学に本学を紹介する使節団を派遣することが決められました。近年交流が深まっているベトナムが最初の派遣先として選ばれ、バンコク教育研究センターの計らいで「ベトナムとの交流検討ワーキンググループ」と共同して進められました。9月13日(日)にハノイ入りし、14日はハノイ工科大学、15日にはハノイ国家大学（本部、自然科学大学、工業技術大学)、16日にはベトナム科学技術アカデミー、17日・18日にはホーチミン市国家大学（本部、自然科学大学)、19日にはダナン大学（本部、ダナン工科大学、ダナン教育大学）を訪問し、21日にはホーチミン市国家大学（工科大学）を別途訪問して、全日程を終了しました。各訪問先では、研究者スタッフと共に学生に対して、大阪大学および各研究科の紹介と共に、留学プログラム紹介小冊子“Osaka University; International Programs at a Glance”などを配付して、グローバル30で新たにスタートする英語による学位取得プログラム、種々の短期プログラム、および日本語・日本文化研修のための短期プログラムなどを紹介し、本学への留学を勧めました。ベトナムでは日本への関心が高く、これまで交流を深めてきたベトナムの研究者および日本に留学経験のあるスタッフとの間で、プログラム、研究内容に亘る密度の高い意見交換がなされました。また、新規に訪問したダナン大学、ホーチミン市国家大学工科大学では大学の概要の紹介から研究室訪問に至るまでの種々の意見交換の中で、お互いの信頼を築く新たなステップとなる有意義な訪問でした。

ハノイ国家大学（工業技術大学）でのセミナー

ダナン大学（ダナン教育大学）おけるセミナー

（国際部国際交流課）

工学研究科が高知県佐川町の小中学校で出張授業を実施

工学研究科では、高知県佐川町と連携協力に関する協定を締結しており、このたび教育面の活動として、9月28日(月)から9月30日(水)の日程で佐川町小中学校において出張授業を実施しました。

出張授業は、「科学を好きになってもらう」ことを目的に、久保　等技術専門職員が佐川町の4つの小中学校で電磁気をテーマとした講義・実験を実施しました。

授業を受けた小中学生からは、「学校では教わらないことで楽しかった。」「家族にも教えてあげたい。」「また来て欲しい。」との感想があり、本事業の実施は小中学生の学習意欲の向上とともに、理工系大学・研究科にとって懸案となっている「理科離れ」という問題の縮小に向けた効果的な取り組みとして期待されます。

（工学研究科・工学部）

高等司法研究科学生生活等サポート委員会主催
公開トーク・セッション「大不況時代の生きがい ～何を求めて学ぶのか～」

新司法試験も大変。合格しても就活で大変。弁護士登録はしたが、タクベン・ソクドク…。平成21年9月30日、21世紀懐徳堂多目的ホールにおいて公開トークセッション「大不況時代の生きがい　～何を求めて学ぶのか～」（主催：高等司法研究科学生生活等サポート委員会）が開かれました。

小雨交じりのあいにくの天候でしたが、20名をゆうに超える学生たちが参加をし、和やかな雰囲気の中、先輩たちの心温まるエールやメッセージが大きな心の支柱となりました。また次の日からの新学期へのモチベーションを高めたところです。

21世紀懐徳堂　多目的ホールにて

とてつもない激流のなかで小舟のように揺れるばかりの私たち。生きることがとても苦しいと感じることが多いこの時代…。司会の池田辰夫教授・末永敏和教授（学生生活等サポート委員会）のもと、世界的な環境法研究者の大久保規子教授（本学法学研究科）、大阪弁護士会副会長の福田　健次弁護士、大手事務所から独立1周年の牧　直樹弁護士、法科大学院2期生の大塚将晃弁護士、心のケアのスペシャリスト石金直美准教授（本学保健センター）から自らのエピソードを交えた貴重なお話しをいただきました。

また、サプライズゲストとして、鬼追明夫先生（元日本弁護士連合会会長・整理回収機構代表取締役、日本漢字能力検定協会理事長）が、ご多忙の中、手弁当でかけつけていただき、学生たちに終始熱く語りかけていただきました。会場の設営等で教務係はじめ多くの方々のお世話になったことに感謝しつつ、前途に導きの光を得た思いでお開きとなりました。

（高等司法研究科）

外部資金獲得に向けた「科学研究費補助金説明会」に２６０名が参加

科学研究費補助金の申請件数の拡大及び採択率の向上を図るため、応募予定者及び事務担当職員を対象とした科学研究費補助金説明会を、去る９月16日(水)に吹田キャンパス、９月28日(月)に箕面キャンパス、９月29日(火)に豊中キャンパスにおいて開催し、約260名の研究者や事務担当者が参加しました。

説明会は、吹田地区は金倉譲教授（医学系研究科）及び鷲尾隆教授（産業科学研究所）、豊中地区は米田悦啓教授（生命機能研究科）及び大竹文雄教授（社会経済研究所）、箕面地区では大坊郁夫教授（人間科学研究科）がそれぞれ講演し、科学研究費補助金制度の現状説明や審査体制、審査でポイントとなる点、研究計画調書を作成する上でのアドバイス等について詳細な説明が行われました。本年度は吹田地区及び豊中地区において、より多面的に審査の傾向や対策等の情報に触れることができるように分野の異なる２名の教授に講演していただきました。また、研究推進課からは本学における応募手続きの流れや、今年度の研究計画調書記入要領を説明しました。

吹田地区で講演する金倉譲医学系研究科教授

このほか、不正使用防止計画推進室から科学研究費補助金の不正使用にかかる説明があり、不正使用防止に対する意識向上を図りました。特に不正使用をした場合の措置等については、具体的に罰則を示し注意を促しました。

説明会後のアンケートでは、「講師が複数なので説明が理解しやすかった」、「不正使用の具体例により、注意すべき点が分かった」、「９月中に開催されたため参加しやすかった」などの声が寄せられました。

（研究推進部研究推進課）

第５回大阪大学“ ゆらぎ ”プロジェクト東京シンポジウム盛況のうちに閉幕

文部科学省科学技術総合推進費補助金「先端融合イノベーション創出拠点の形成」プログラムにおける大阪大学提案課題「生体ゆらぎに学ぶ知的人工物と情報システム」（通称：ゆらぎプロジェクト）では、９月29日(火)、秋葉原コンベンションホールにおいて通算５回目となるシンポジウムを開催いたしました。

これまで本プロジェクトでは、生物の動作原理を工学的に応用し、超複雑なシステムを制御可能にするとともにケタ違いの省エネを実現する未来社会の基礎技術開発に取り組んできました。今回のシンポジウムでは、この取組みの構想と応用可能性をより明確に理解していただくことを主眼として質疑の時間を例年よりも多めに取ったこともあり、結果として20名を超える方々から質問・コメントがよせられ、活発な質疑応答が展開されました。当日は立ち見が出るほど多くの方々に参加いただき、活発な質疑と合わせて、大盛況のうちに閉幕となりました。

講演する柳田教授（生命機能研究科）

講演する石黒教授（基礎工学研究科）

（生命機能研究科）

薬学部新入生合宿研修

薬学部新入生合宿研修が、9月29日(火)、30日(水)の日程で、京都市右京区京北にある京都府立ゼミナールハウスで新入生84名、教職員21名が参加して実施されました。

これは、専門教育の授業が始まる1年次2学期の開始直前に、薬学部の現状と将来に対する認識を再確認するとともに、学生と教職員の親睦を深めることを目的として行っているものです。

1日目は、京都市にある島津製作所の三条工場を見学した後、ゼミナールハウスに会場を移しました。そこでは、初めに小林学部長の講話「大阪大学薬学部の目指すもの」、八木教授の履修に関する説明がありました。

分科会の風景

海外留学経験談の講演風景

夕食は野外テントでバーベキューを行い、京都の奥座敷と形容される素晴らしい自然の中、肉や野菜に舌鼓をうちながら、にぎやかに交流を深めました。

その後、橋本准教授による海外留学経験談の講演があり、学生は真剣な様子で聞き入っていました。

2日目は、少人数のグループで分科会を行い、学生と教員が学生生活や薬学の未来などについて、自由なテーマで話し合いました。

このように、盛りだくさんな日程でしたが、実りある研修となりました。

(薬学研究科・薬学部)

理学研究科・理学部で環境美化実施

理学研究科・理学部では、例年実施している学内環境美化活動の一環として、本年も10月1日(木)に理学研究科棟周辺の清掃を実施しました。多数の教職員・学生の参加があり、用意した軍手やゴミ袋が瞬く間になくなりました。

当日は連日続いた雨も止み、秋晴れの下、教職員・大学院学生・学部学生及び外国人留学生等総勢約500名が一体となって、理学研究科・理学部構内を中心に豊中地区正門、大高の森付近の清掃区域で、約30分にわたりゴミ拾いや除草作業等に精を出しました。

美化活動をおこなう東島研究科長

作業風景

この清掃作業は、日頃忘れがちな環境美化に対する意識を再確認するとともに、教職員・学生が快適なキャンパスライフを送れるよう、美化意識の高揚を図ることを目的としておこなっているものです。

作業終了後はお茶を飲みながら歓談し、平素は教育研究の繁多にまかせてお互いに話す機会の少ない教職員・学生のコミュニケーションを深める場としても大いに役立ちました。

(理学研究科・理学部)

平成２１年度
大阪大学新入職員研修実施

平成21年度第2回新入職員研修が、10月5日(月)から7日(水)までの3日間にわたり本部事務機構棟401会議室及び中之島センター等において行われました。

この研修は、新入職員17名を対象として、「職員としての自覚と意識の確立を図り、新入職員として必要な基礎的知識・技能を身につけ、職場への適応力を養う」ことを目的として実施されたものです。

開講式では、鷲田清一総長から「大阪大学グラウンドプラン」の内容を交えながら、本学職員としての職務を認識するとともにスキルアップに努めていただきたい旨、激励の言葉がありました。その後、外部講師から「社会人の心構えを身につけること」、「主体性を養うこと」、「コミュニケーション力強化」等について2日間にわたり講義・演習が行われました。

鷲田清一総長の挨拶

演習の風景

3日目は、国立文楽劇場において、出向職員との面談等が行われ、続いて適塾と懐徳堂旧阯の碑を見学しました。その後、中之島センターに会場を移動して、中之島センターの概要の説明を受け、引き続き高杉英一理事・副学長から「大阪大学の歴史」の講義が、月岡英人理事・副学長から新入職員に期待すること等についての講話が行われました。

閉講式では、月岡英人理事・副学長から修了証書授与の後、この研修で学んだことを実際の業務を行う際に活用いただくとともに、大阪大学のために活躍いただきたい旨、激励の言葉がありました。

この研修を通じて受講者は、お互いに親睦を深め合うなど有意義な時間を共有するとともに、3日間の研修を全員、無事修了しました。

（総務部人事課）

平成２１年度
工学研究科博士前期・後期課程１０月入学式挙行

平成21年度工学研究科博士前期・後期課程10月入学式が、10月7日(水)に、医学部銀杏会館内阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて挙行されました。

当日は、文部科学省の「国費外国人留学生（研究留学生）の優先配置を行う特別プログラム」に入学した外国人留学生と、博士前期課程・後期課程10月新入生が出席しました。

式は、馬場章夫研究科長、谷口研二評議員を始め、副研究科長並びに各専攻長の列席のもと、掛下知行教務委員長（副研究科長）の司会により、すべて英語を使用して進められました。初めに、馬場研究科長から新入生歓迎の式辞が述べられ、その後、博士前期課程27名、博士後期課程44名の入学生を代表して、博士後期課程精密科学・応用物理学専攻量子デザインエンジニアリング研究特別プログラムのEscano Mary Clare Sisonさんが代表挨拶を行い、10月入学式を閉会しました。

（工学研究科・工学部）

Escano Mary Clare Sisonさんによる入学生代表挨拶

平成２１年度
本部事務機構火災・地震総合訓練実施

平成21年度本部事務機構火災・地震総合訓練を10月13日(火)、本部事務機構職員約140名が参加して実施しました。

訓練は、消防法の一部改正に伴い、新たな消防計画を作成し、その消防計画に基づき、本部事務機構の本部共通棟3階北側人事課事務室湯沸室から火災が発生したこと及び、エレベーターが非常停止し教職員等が閉じ込められたことを想定し、「通報訓練」、「救出訓練」、「消火訓練」及び「避難訓練」を行いました。

引き続き、本部事務機構前庭にて「水消火器による初期

消火訓練」を行った後、本部事務機構玄関前にて「屋内消火栓使用訓練」を行いました。

訓練後、門田守人理事から今回の訓練を踏まえて、今後は防火・防災に関して十分に対応できるようにしていきたいとの挨拶がありました。

当日は天候にも恵まれ、参加者全員、最後まで熱心に訓練に取り組んでいました。

（財務部資産決算課）

ミッションマネジメント研修実施

大阪大学職員研修「大学に関する諸課題についての研修」の一環として、ミッションマネジメント研修が、10月16日(金)に本部事務機構401会議室で行われました。

本研修は、「意識改革を行うための方策として、本学のモットー及び教育理念を確認したうえで、それぞれの担当部署におけるミッションを検討し、それを実現するための戦略を展開するまでの考え方を学ぶことにより、自立的に考える力を身につける」ことを目的として実施しました。

本学の事務改革を支援していただいているコンサルタント会社より講師を迎え、講義・グループ討議・プレゼンテーションにより研修が進められました。

参加者30名を6つのグループ（部局運営、人事、教務、研究協力、財務、病院経営の6部門）に分けて実施しましたが、グループ分けには工夫を凝らし、グループ内の一部のメンバーは、あえて現在の職務内容と異なる部門に所属していただき、別の視点から当該部門のミッションを議論していただきました。

また、本年4月より設置したPMO準備室の6人も、各グループのファシリテーターとして参加し、グループ討議を大いに盛り上げました。

研修風景

受講後のアンケートで、「それぞれのミッションを意識し仕事をすることの必要性に気付いた」、「大学職員として何を目指して仕事をしていくのか、そのことが非常に重要であることが分かった」等の意見が数多くあったため、本研修については、来年度以降も引き続き実施することとしました。来年度も皆様のご参加をお待ちしております。

（事務改善推進室）

「第7回市民フォーラム」開催

大阪大学大学院歯学研究科では、昨年に引き続き、10月17日(土)に毎日新聞社ビル地下1階のオーバルホール（大阪市北区）において、「第7回市民フォーラム」を開催しました。

米田俊之研究科長の開会の挨拶の後、同大学院教員ら5名が、今回の総合テーマ「口福への誘い―歯科診療の新展開―」に基づき、最先端の歯科治療や歯科医療現場の現状を題材とした講演を行いました。

約400名の参加者が講演を熱心に聴講し、講演後の総合討論では活発な質疑応答が行われ、最後に大嶋隆歯学部附属病院長からの挨拶があり、盛況のうちに閉会しました。

参加者からは「各講演者から歯科医療の興味深い話が聞けて大変参考になった」、「是非継続してフォーラムを開催してほしい」といった意見が数多く寄せられ、有意義な講演会となりました。

（歯学研究科・歯学部）

米田研究科長による開会の挨拶

サンクトペテルブルク大学（ロシア）と大学間学術交流協定締結

10月22日(木)にロシア連邦サンクトペテルブルク大学（Saint-Petersburg State University　http://www.spbu.ru）において、本学とサンクトペテルブルク大学との大学間学術交流協定が締結されました。調印式には、本学より辻毅一郎国際交流担当理事、弘津禎彦グローニンゲン教育研究センター長、本協定申請部局の一つである言語文化研究科から林田理惠教授が出席し、サンクトペテルブルク大学からはK. Khudoley国際交流担当副学長、I. Gorlinsky教育・研究担当副学長が出席しました。

今回の調印式は、大阪市のサンクトペテルブルク姉妹都市提携30周年記念事業にあわせ執り行われたもので、調印式には両市から北川啓三大阪市副市長、舟戸良裕大阪市会議長、V. Yagyaサンクトペテルブルク市会副議長も列席し、二国間の学術交流の今後の発展にとって重要な意義をもつものとして二大学間の協定締結が高く評価されました。

協定書を交わし握手をする辻理事（左）とKhudoley副学長（右）

会場となったペトロフスキーホールには大学や行政関係者以外にも在ペテルブルク日本総領事館や企業から多数の列席者があり、また報道関係者も多くつめかけ、今回の協定締結に対する期待、関心の高さがうかがえ、関係者一同、今後の交流内容具体化に向けより一層の努力が必要との思いを強くしました。

（国際部国際交流課）

平成２１年度
学術情報リテラシー教育担当者研修（大阪大学会場）開催

附属図書館と国立情報学研究所との共催による平成21年度学術情報リテラシー教育担当者研修（大阪大学会場）が、10月21日(水)から10月23日(金)の3日間にわたり、附属図書館総合図書館を会場として開催され、定員を超える応募の中から選考された西日本各地の国公私立大学の図書館職員54名の受講者がありました。

グループ討議発表後の質疑応答の様子

この研修は講義やグループ討議を通じて、各大学等の研究機関において学術情報リテラシー教育を企画・運営するための知識と技術を習得し、より効果的な実施を目指すことを目的としており、平成15年度から実施されています。（平成16年度からは大阪大学が西日本会場を担当）

研修は青山学院大学の野末俊比古准教授による講義「学術情報リテラシー教育の理論と動向」に始まり、昨年の受講者による本研修で得た成果を基に所属機関で実践した事例報告、事前に選択されたテーマに焦点を絞ったグループ討議などが3日間を通じて活発に行われ、最終日にその成果が発表されました。

（附属図書館）

先輩職員との内定者懇親会実施

10月26日(月)、本部棟401会議室において、採用内定者を対象に先輩職員との内定者懇親会を実施しました。

この懇親会は、「大阪大学職員として働くにあたり、意識・意欲の向上を図ること」、「採用内定者への具体的な大阪大学像及び大学事務職員像を提供すること」、「職員と採用内定者間の積極的な交流を図ること」及び「大阪大学で働くことに対しての疑問、不安等の解消を図ること」を目的として実施されたものです。

当日は、後藤宏平総務部長から挨拶及び大阪大学職員としての心構えについて、講話が行われました。引き続いて、

後藤総務部長の講話

先輩職員との意見交換

採用内定者の自己紹介を行った後、職場見学として医学部附属病院未来医療センター及び医学資料室を訪れました。

その後、ティータイムでは和やかな雰囲気の中、採用内定者同士親睦を深めた後、先輩職員12名と採用内定者23名が意見交換を行いました。

意見交換では、採用内定者は積極的に疑問・不安等について先輩職員に質問し、先輩職員からは採用内定者へアドバイスをするなど活発に意見交換を行い、有意義な懇親会となりました。

（総務部人事課）

高等司法研究科・法学研究科附属法政実務連携センター主催
税法講演会「課税権の対立と国際交渉」

10月28日(水)、角田伸広大阪国税局課税第一部長を講師にお迎えして、税法講演会「課税権の対立と国際交渉」を開催いたしました。講演では、経済のグローバル化が急速に進展する中での多国籍企業に対する課税権の対立について、米国・中国を中心に具体的な事例を交えてわかりやすくご説明くださいました。特に、外資系企業への優遇税制から一転課税強化という中国当局の政策変更にともなう問題や、新興国間での無形資産のロイヤリティを巡る問題など、迅速な対応が必要とされる多様な課題に、今、日本が直面していることを強調されました。受講生からは、「国税局が、国内の個人や企業の課税を取り扱うだけでなく、現在では22の国々との間で課税問題を巡る交渉を行っているという事実に大変驚いた」「グローバルで複雑な課税問題に触れ、Tax Lawyerの魅力を改めて実感した」「中国などの新興国との間に税を巡る新たな問題が発生していることに興味をもった」などの感想が寄せられました。

(高等司法研究科、法学研究科・法学部)

平成21年度
国立七大学学生関係協議会の開催

平成21年度国立七大学学生関係協議会が、去る10月28日(水)に大阪大学を当番校として、吹田キャンパス銀杏会館において開催されました。

国立七大学の理事(副学長)・学生関係部課長を構成員とするこの協議会に、今回は、加藤重治大臣官房審議官(高等教育局担当)及び枝　慶高等教育局学生・留学生課課長補佐が出席し、「高等教育局所管事項(平成22年度概算要求)」等の説明及び「キャリア支援方策について」の情報交換が行われました。

平成21年度国立七大学協議会

工学部の授業を参観する加藤審議官

その後、協議会では「大学院副専攻制度の取り組み」について、事例紹介・質疑応答を踏まえて、活発な意見交換が行われ、今後の各大学における制度構築のための参考として活用することとなりました。一方、加藤審議官及び枝課長補佐は医学部附属病院等をはじめ、学内の施設を精力的に視察し、多くの教職員と意見交換を行いました。

最後に次年度の同協議会は京都大学が当番校として開催することが了承されました。

(学生部学務課)

第14回
上海交通大学ー大阪大学学術交流セミナー開催

大学間学術交流協定校である上海交通大学との交流の一環として、毎年行われている「第14回上海交通大学ー大阪大学学術交流セミナー」が10月28日(水)から30日(金)まで、上海交通大学で開催されました。

このセミナーは、同大学との交流協定締結を機に、平成7年に大阪大学で第1回目が開催されて以降、両大学で毎年交互に行われているもので、今年は本学から鷲田総長を始め、37名の教職員・学生が参加しました。

初日午前中のオープニングセッションでは、鷲田総長、張学長の開会挨拶に続いて、両大学間の学生交流に関する覚書の更新署名式や、鷲田総長の著書の贈呈式などが行われました。なお、贈呈された鷲田総長の著書は、上海交通大学に新設された図書館に所蔵されることになっています。続いて、上海交通大学国際担当副学長と亀岡国際部長による大学の現況紹介のプレゼンテーションが行われました。

午後からは、各参加者が「材料」「情報」「船舶」「経済」「物理」の5分野と、今年度から新たに交流分野に加わった「歴史」「光学」の全7分野に分かれて2日間わたる分科会を行い、研究交流を深めました。

(国際部国際交流課)

薬学部創立60周年記念行事

薬学部は昭和24年に医学部薬学科として発足して以来、本年5月で創立60周年を迎えました。これを記念して10月31日(土)にホテル阪急エキスポパークにおいて創立60周年記念行事を挙行しました。

記念行事は記念式典、記念講演会及び記念祝賀会の3部からなり、記念式典においては小林資正学部長が式辞とともに薬学部の沿革と将来の展望について説明されました。続いて伊藤信行京都大学薬学部長、眞弓忠範本学名誉教授、萬年成泰大阪大学薬友会(本学部同窓会)会長からの来賓祝辞が行われました。

式典終了後、引き続き記念講演会が催され、講演者として現在官庁や薬業界で活躍しておられる薬学部・薬学研究科ご出身の厚生労働省岸田修一大臣官房審議官、沢井製薬株式会社澤井弘行会長、中外製薬株式会社大杉義征営業本部学術情報部部長、第一三共ヘルスケア株式会社大江方二顧問の諸氏が壇上に立たれました。会場には学内外から230人の参加者が訪れ、ほぼ満席の状態でそれぞれの業界でのご活躍ぶりに熱心に聞き入っていました。

鏡開き

講演者の熱弁により大盛況の記念講演会が終わり、会場を移して祝賀会が催されました。祝賀会には公務ご多忙な鷲田清一総長にもご出席いただき、医療をとりまく社会環境のめまぐるしい変化のもと、社会の要請に応えるべく尽力することへの激励をいただきました。その後大阪大学の法被を着た来賓者7名と学部長による鏡開きが行われ、薬友会最高顧問である近藤雅臣名誉教授の発声で乾杯後、出席者たちは歓談を楽しみました。2時間の宴会でありましたが、終始なごやかな雰囲気のもと会話の尽きることがなく、盛会裡に閉会となりました。

(薬学研究科・薬学部)

「２１世紀の懐徳堂プロジェクト」スタート

11月5日(木)午後5時30分から大阪市中央区の大阪倶楽部において「21世紀の懐徳堂プロジェクト」の記者説明会が行われました。

このプロジェクトは、自分たちが暮らす地域の発展のために、自ら学びの場を作り、自ら学び、その学んだことを自らの地域に還元する」という懐徳堂の精神を再びこの地に甦らせ、「文化立都」としての大阪を再構築することを目指しています。具体的には、大阪市、本学21世紀懐徳堂、(財)大阪21世紀協会が連携し、それぞれの事業を展開する中で参加団体を増やすとともに、潮流をさらに大きなものとしていく予定にしています。

当日は、平松邦夫大阪市長、堀井良殷21世紀協会理事長、鷲田清一総長が呼びかけ人として出席し、平松市長から「中之島を知の蔵屋敷に」、鷲田総長から「中之島を“情”と“知”溢れた学びの場に」、堀井理事長から「アーティストに場を提供したい」とそれぞれの抱負が述べられました。

(企画部広報・社学連携事務室)

旧制大阪高等学校「青春の像」除幕

11月7日(土)午前10時から豊中キャンパス「大高の森」において旧制大阪高等学校(大高)「青春の像」の移設終了に伴う除幕式が催されました。「青春の像」は、昭和37年に同校創立40周年を記念し大阪市阿倍野区の同校跡地に建設されたものですが、現在の同地所有者であるUR(都市再生機構)が同地を売却する方針を打ち出したため、「大高の森」への移設が決定したものです。

当日は、晴天に恵まれ、同窓会から、村田義人会長はじめ木村正治幹事長、金森順次郎元総長他十数名の会員が出席、本学からは鷲田清一総長、西田正吾理事が出席し木村幹事長の掛け声で除幕されました。

その後、木村幹事長から謝辞が述べられ、さらに、幹事長の指揮の下、会員全員が像の前に整列し、「全寮歌」を斉唱、その声は年齢を感じさせない溌剌としたものでした。

最後に、鷲田総長から「本学の教養部の前身とも言える大高の像をこの地に移設できたことは教養教育に力を注いでいる本学にとって非常に喜ばしいことであり、毎日通学する学生がこの像を見上げ、心を新たにして勉学に励むことを祈っている。」旨の挨拶があり、和やかなうちに散会となりました。

(企画部広報・社学連携事務室)

第5回 全学FDセミナー

11月10日(火)、教育情報室と大学教育実践センターが主催する第5回全学FDセミナーが、豊中・ステューデント・コモンズで開催されました。このセミナーは、各研究科で取り組まれているFD活動について情報交換をすると共に、全学的なFD活動を推進するために企画されました。

第一部では、小泉潤二副学長の開会の挨拶に続いて、岡山大学の橋本勝教授が、「学生発案型授業と主体的学び――学生参画型FDで何ができるか」というテーマで基調講演されました。既にいくつかの大学では教育改善やFD活動に学生を巻き込んでいく取組が行われていますが、その先進校である岡山大学の取組が紹介されました。その中で、このような取り組みを可能にしている要点や、学生がどこまで関与するのかなどが述べられ、今後の教育改善の方法を考えるきっかけを提供されました。

第二部では、各研究科からのFD活動が紹介されました。まず、佐藤宏介基礎工学研究科教授は、基礎工学部等で行われた授業アンケートの結果を詳細に分析し、教員にフィードバックすることによって有効なFDを行っている様子について説明されました。次に、言語文化研究科の日野信行教授と我田広之教授は、共通教育科目別FD、各種シンポジウムの開催、公開授業、新入生合宿研修等、当該研究科で盛んに行われているFD活動について報告されました。歯学研究科の竹重文雄教授は、学部、研究科および付属病院で取り組まれている様々な試み、即ち、臨床実習の改革やカリキュラム改革あるいはコンピュータを用いた共用試験の実施について、また、医療系カリキュラムプランニングワークショップの様子について紹介されました。最後に大学教育実践センターの服部憲児准教授が同センターで行われている新任研修等のFD活動の紹介の後、新しい試みである共通教育科目別FDや共通教育TA研修、あるいは学生参画型のFD活動（パンキョー革命）について報告されました。

各発表後には質疑応答の時間が設けられ、それぞれ活発な議論がなされました。

最後に、大学教育実践センター、工藤真由美センター長より、学生を信頼し、任せていくことの大切さを感じた等の挨拶がなされ閉会となりました。なお、当日は、約40名の教職員の参加がありました。

（大学教育実践センター）

バレーボール教室開催

大学教育実践センター・運動健康支援部門では、11月14日(土)、豊中地区第2体育館において、「バレーボール教室」(ゲスト講師：廣紀江・学習院大学教授、ロス五輪銅メダル、ソウル五輪4位、ユニバシヤード神戸大会優勝他)を主催しました。教職員・学生・近隣住民52名が参加し、大変盛り上がった教室となりました。

今年度は、レベル別に2クラス設定したため、受講者のレベルにあったスキルをじっくり学ぶことが出来ました。初心者クラスでは、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスの技術を中心に、上級者クラスでは、スパイク、ブロックに至る技術を学ぶことが出来ました。楽しく盛り上がった雰囲気の中で、バレーボールを堪能した多くの笑顔が見られました。

（大学教育実践センター）

FRC学生チャレンジ
第6回サタデーランチ

「サタデーランチ」は、工学研究科附属フロンティア研究センター（FRC）が学生のユニーク＆チャレンジングな企画提案を支援する「学生チャレンジ」プログラムに採択されています。この企画は、高校生に阪大を紹介することが目的ですが、通常のオープンキャンパスなどとは異なり、学生主導で少人数の高校生に阪大生の普段の生活の様子なども紹介するということを目的に年に数回開催しております。今年度もこれまでに5回開催し、参加した高校生の皆さんからは阪大生のリアルな話が聞けて良かった等、好評をいただいています。

研究室で説明を受ける参加者

研究室の見学

11月7日(土)に、第6回のサタデーランチを開催しました。今回は、参加者に大学の雰囲気を味わってもらうため、工学研究科生命先端工学専攻の福崎研究室の見学を企画しました。大学と高校の学習に対するスタンスの違いや、研究室生活の様子などについて説明を受けた後、実験室内を見学してもらいました。研究室内でも一部の学生や研究員しか使用を許可されていない貴重な測定機器なども見ることができ、高校生らに第一線での研究の雰囲気を肌で感じてもらうことができました。

研究室見学の後は、生協「ファミール」にて昼食会を開き、阪大生の生活の様子や受験勉強の方法など、参加者の色々な疑問に答えながら昼食を楽しみ、盛会のうちに終了しました。

本企画は、FRCからの支援に加えて、大阪大学工業会からも協賛を得ており、関係者に感謝申し上げるとともに、次回の開催（12月19日(土)予定）に向けて、より一層イベントを盛り上げていく予定です。

昼食会

サタデーランチのHPを作っております。是非、お立ち寄り下さい。
http://www.chem.eng.osaka-u.ac.jp/gakupro/saturday_lunch/index.html（サタデーランチ実行委員会）

（工学研究科・工学部）

第28回
千石会総会開催

11月11日(水)午後4時から総合図書館6階図書館ホールにおいて、会員67名の出席のもと、第28回千石会総会が行われました。

「千石会」は、大阪大学に事務系職員として在職し、退職した者が、終生互いに交流し親睦を重ねることを目的として、昭和57年5月に結成されたもので、正会員412名本学の現職事務系職員である賛助会員82名の計494名により構成されております。

当日は、辻　仁　会長の挨拶で始まり、議事に先立ち、物故者の報告と黙祷が行われました。

引き続き議事に入り会員の異動報告、役員の交替、会計報告及び会則の見直しについて協議が行われた後、同会の顧問である月岡英人　理事から「大阪大学の近況報告」と題して本学の活動状況について報告があり、出席者は熱心に耳を傾けていました。

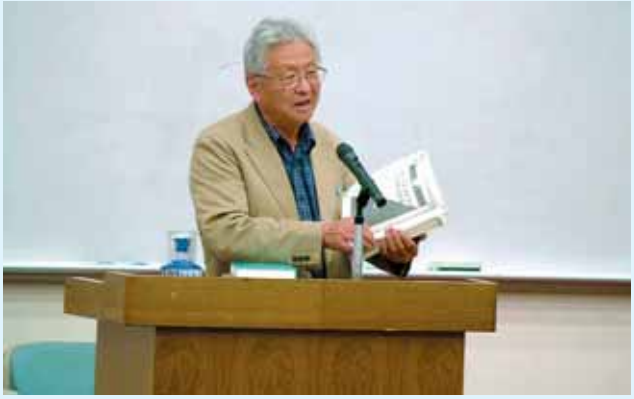
総会終了後、場所を学生交流棟カフェ&レストラン「宙」に移し賛助会員を交えて懇親会が賑やかに行われ、次回総会での笑顔の再会を誓い、盛会裡に終了しました。

(総務部総務課)

石濱文庫記念講演会開催

附属図書館主催、箕面市立図書館後援による石濱文庫記念講演会が、11月12日(木)に外国学図書館AVホールを会場として開催され、学生・教職員のほか一般市民を含め120名が参加しました。

講演会場の様子



田中克彦一橋大学名誉教授

堤一昭大阪大学大学院文学研究科准教授

石濱文庫は、東洋史学者で西域古文書学の第一人者であった石濱純太郎博士(1888～1968)の旧蔵書で、4万冊をこえる学会屈指といわれる東洋学コレクションです。モンゴル語、満洲語、西夏語、ウイグル語、チベット語などに関する資料が数多く収められています。

講演は、モンゴル語学、言語学が専門の田中克彦一橋大学名誉教授(「石濱文庫が語る世界」)、と東洋史・東洋史学が専門の堤一昭大学院文学研究科准教授(「石濱文庫の拓本コレクション--漢学から東洋学へ--」)によりおこなわれました。

漢学をはじめとして言語学、歴史学など幅広い範囲にわたる膨大な量と高い質の石濱文庫と、大阪の町人学者の伝統を受け継ぎ市井の学者であることに誇りを持ちつづけた石濱純太郎という人物の学問世界の広さと深さ、交友関係などが紹介されました。

(附属図書館)

第２回革新的研究教育基盤機器開発整備事業ならびにリユース研究教育基盤機器整備報告会開催

科学教育機器リノベーションセンターでは、去る11月4日(水)に「第２回革新的研究教育基盤機器開発整備事業ならびにリユース研究教育基盤機器整備報告会」をコンベンションセンターにおいて開催しました。

革新的研究教育基盤機器開発整備事業は、学内公募で厳選された７件の開発プロジェクトを文部科学省に概算要求を行い、平成20年度から５年間の開発事業として認められ、市販品に比べて低コスト、高性能な阪大“only-one”の汎用機器開発を目指すものであり、当センターの先端機器開発室が支援を行っています。

一方、リユース研究教育基盤機器整備は、「大阪大学における設備整備に関するマスタープラン」に基づき、学内にあるリユース可能な研究教育機器を修理・復活再生させ、汎用性研究教育基盤機器として広く学内の教員や学生に共同利用させることを目的に、学内経費である教育研究等重点推進経費の要求を行い、平成19年度から順次実施しているもので、当センターのリユース促進室が担当しています。

西尾章治郎理事・副学長による開会挨拶

報告会は、西尾章治郎理事・副学長による開会挨拶の後、中嶋英雄科学教育機器リノベーションセンター長の挨拶及び革新的研究教育基盤機器開発整備事業についての概要説明が行われ、各プロジェクト担当教員から機器開発の進捗状況並びに開発計画についての報告が行われました。

報告会の様子

午後からは、(独)科学技術振興機構プログラムオフィサーの本河光博氏による「我が国の高度計測技術の問題点」と題した講演に続き、石塚副センター長からリユース整備の概要説明が行われた後、各部局のリユース機器担当者によるリユース整備状況、共同利用状況等について報告が行われました。

当日は、教職員、学生を含め約75人の参加者があり、活発な質疑応答が行われたほか、同センターの活動内容を広く理解していただく大変有意義な機会となりました。

(科学教育機器リノベーションセンター、研究推進部研究推進課)

平成２１年度 永年勤続者表彰式挙行

平成21年度永年勤続者表彰式が、11月20日(金)午前11時からコンベンションセンター会議室１において、受彰者35名のうち27名の出席のもとに挙行されました。

式は、鷲田清一総長から受彰者一人一人に表彰状が授与された後、式辞が述べられ、続いて、受彰者を代表して工学研究科の加藤由子氏が答辞を述べ閉式しました。

今年度の受彰者は、次のとおりです。

中原栄作(本部)
塩見哲郎(本部)
門脇英雄(本部)
長野義治(本部)
竹下浩史(本部)
大西啓文(本部)
西岡久夫(本部)
中尾広一(本部)
倉屋誠(本部)
清水滝次(本部)
髙野恵子(図)
山口智子(図)
浅田一実(法)
松月有子(理)
波多野貴公子(医)
岩﨑朋之(医病)
鍋谷佳子(医病)
赤澤幸美(医病)
池上雅子(医病)
樫熊美由紀(医病)
秋元環(医病)
豊田みゆき(医病)
福田佐和子(医病)
植田康樹(医病)
松本章士(医病)
竹内俊夫(医病)
山崎万里子(医病)
村本章(医病)
山本充範(医病)
山内孝二(歯)
加藤由子(工)
稲葉勝一(言)
吉澤佐代子(言)
中本有紀(極限)
南野晋也(実践)

(総務部人事課)

基礎工学部技術職員研修（第１６回）実施

基礎工学部では、11月17日(火)に「基礎工学部技術職員研修（第16回)」を同学部会議室（A棟2階）において実施しました。

この研修は、教室系の技術職員及び特例嘱託技術職員を対象に、大学における技術職務全般についての視野を養わせ、その立場と責務を自覚させるとともに、自己及び相互啓発の機会を与えて、職員の資質と技術の向上を図り、職務能力の増進を促すことを目的に実施したものであり、研修会には基礎工学部をはじめ、大学院情報科学研究科、極限量子科学研究センター、太陽エネルギー化学研究センターから計12名の参加がありました。

当日は、戸部義人学部長による開講式に始まり、大学院基礎工学研究科の伊藤正教授を講師に迎えての特別講演「光とナノサイエンス－未来技術への光展開－」に続いて、同研究科の井上義朗教授を講師に迎えての特別講演「流体のたくらみ－混合の不思議を追って－」が行われました。午後からは極限量子科学研究センターの施設見学の後、受講生による技術発表が行われ、活発に意見交換がなされました。最後に、田谷正仁研修実行委員会委員長から修了証書の授与が行われ、研修を無事修了いたしました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

「業務改善アイデア賞」表彰式開催

「業務改善アイデア賞」表彰式が11月20日(金)、総長室において行われました。

「業務改善アイデア賞」は、「国立大学法人大阪大学における業務改善方法の公募及び表彰に関する要項」及び「業務改善アイデア公募要領」に基づき教職員から提案された業務改善のアイデアを、事務改革推進本部において審査し、採用が決定されたものの中から特に業務改善に資すると認められたものに対して授与される賞です。

今回は、平成20年10月から平成21年9月までに採用が決定された6件（応募件数26件）を対象として選考を行い、以下の2件の提案に対して優秀者賞が授与されることとなりました。

表彰式では、鷲田総長、西田理事・副学長（事務改革推進本部長)、月岡理事・副学長（業務改善WG議長）等の出席のもと、鷲田総長から表彰状が手渡されました。

また、2名の受賞者には副賞として各5万円が支給されることとなっています。

所　属	職	氏　名	提　案　題　名
薬学研究科教務係	係　長	金　田　幸　三	産前・産後休暇及び育児休業職員の代替として勤務する派遣職員の業務日報の廃止
微生物病研究所研究協力係	主　任	松　田　晃　蔵	厚生労働省科学研究費補助金に係るマニュアルの作成

（事務改善推進室）

感動のライブ・セッション実現!!
第2回ECLIPSE Master Class

11月17日(火)、第2回ECLIPSE Master Classは大阪の梅田にあるライヴハウスHills Bread Factoryで開催された。当日は雨にも関わらず延べ約200名の来場があり、大阪大学から参加した学生も大変満足したと思います。

今回の第2回ECLIPSE Master Classは前回同様、大阪大学21世紀懐徳堂と富士通テンの共催で実現しました。マスタークラスとは、欧米で音楽や演劇などを学ぶ学生にプロが直接指導をする授業のことを指します。このマスタークラスを富士通テンの技術が生み出したECLIPSE TDスピーカーを使用して行うのがECLIPSE Master Classである。

9月半ばの頃、音楽に興味のある阪大生10人が集まりました。それから、10人の学生スタッフと富士通テンの担当者で企画、運営について何度も定例会を行い、実現に向けて努力しました。今回はアメリカのバークリー音楽大学から卒業したての有望なアーティストLebecca MuirとJon Levyを含む4名を招いて無料のライヴとレコーディング

を行うことになりました。学生スタッフも意気込んで企画にあたり、ラジオ放送局での広報、集客方法、ライヴ後のディスカッション、そして学生とアーティストとのセッションなど、次々とイベント案を出して実行しました。何といってもライヴのラストでの、阪大生のサックスの二人組とのセッションは、感動的なものとなりました。

今回、学生スタッフは何かを創り上げることの大変さを感じつつも、大きな達成感と充実感を得られたに違いありません。なにより、きっと近い将来、この経験が自身を支える良き礎になると思います。ライヴハウスのステージは、一生忘れることはできないでしょう。改めて、このような機会を下さった大阪大学21世紀懐徳堂と富士通テンの皆様に感謝の意を述べると共に、バークリー音楽大学や関係各位の皆様にも深く御礼を申し上げます。

（文学研究科文化動態論専攻　修士課程1年　櫻井つかさ）
（21世紀懐徳堂）

The 6th wwPDB Advisory Committee Meeting開催

蛋白質研究所では、米国（RCSB-PDB, BMRB）および欧州（EBI-PDBe）と協力し、日本蛋白質構造データバンク（PDBj）として、worldwide PDB (wwPDB) という国際的な蛋白質立体構造データベースの維持・運営・高度化を進めています。PDBj では、全世界の 25 ～ 30%にあたるデータを登録・整備する一方、種々のウェブサービスや二次データベースの構築を行い、主にアジア・オセアニア地区へのサービスに務めています。

第6回wwPDB諮問委員会メンバー

本年 11 月 6 日(金)には、X 線結晶構造解析、NMR、電子顕微鏡解析等を行う世界中の構造生物学の専門家と、wwPDB を運営する 4 つの組織の代表が大阪大学蛋白質研究所に集合し、当研究所の中村春木教授（PDBj 統括責任者：写真前列左端）をホストとして、第 6 回の wwPDB 国際諮問委員会が開催されました。今回は、近年の進展が著しいインドと中国からも、準メンバーを特に招待いたしました。会議では、wwPDB の運営に対する評価がまず行われ、wwPDB のデータの検証法やデータ・フォーマットの問題等、データベースのポリシーや運営についての重要な諸問題が議論され、来年米国で開催予定の次回諮問会議までの改善点等の指摘が行われました。

（蛋白質研究所）

第4回大阪大学バンコク公開講演会「感染症から私たちの身を守る」

11 月 7 日(土)、バンコク公開講演会「感染症から私たちの身を守る」がバンコク教育研究センターおよび日・タイ感染症共同研究センターの共催で、グランドミレニアムスクンビットホテル（バンコク）にて開催されました。第 4 回目を迎えた今年度の講演会は、3 名の著名講師をお招きしての幅広い内容での講演となり、132 名もの在タイ邦人の参加がありました。

大嶋歯学部附属病院長

森島恒雄岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授による「新型インフルエンザ　最近の動向から」では、新型インフルエンザウイルスの特徴、感染時の症状や対処等について、岡慎一国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター長の「エイズに対する正しい知識」では、HIV/ エイズの差別・偏見問題、治療や対策の国際比較等について、お話いただきました。本学からは大嶋隆歯学部附属病院長に「むし歯と歯周病－予防から治療まで－」と題してご講演いただき、虫歯が引き起こす障害や歯周病の原因、症状、治療方法等について、ご教示いただきました。

なお、本講演会の内容は日・タイ感染症共同研究センター HP（http://www.rcc-eri.org/）に掲載されています。

（国際部国際連携課）

職員のための英語プレゼンテーション能力養成研修実施

職員のための英語プレゼンテーション能力養成研修が11月10日(火)に銀杏会館で実施され、各部局から37名の受講者の参加がありました。この研修は国際交流に携わる職員が英語によるプレゼンテーション能力を身につけることで、グローバル30の採択、世界大学ランキングの上昇に伴い増加する海外来訪者との交流の中で本学の魅力を充分に紹介し、サービスをより充実したものとすることを目的に実施されました。講師には、日本人への英語教育、プレゼンテーション教育の経験が豊富な、言語文化研究科のロバート・オモハン特任准教授をお招きし、レクチャー、グループワーク及びプレゼン実技という参加体験型の形式で実施されました。今回の経験を受講者各自が今後の業務に活用されることを確認し、研修を無事修了しました。

なお、今後、この英語プレゼン研修は定期的に、また能力別（ビギナー～上級）に開催することも検討しております。多くの皆様の参加をお待ちしております。

グループワーク

オモハン准教授.

（国際部国際交流課・国際企画推進本部）

理学研究科・理学部消防訓練実施

理学研究科・理学部において、11月12日(木)13時30分から消防訓練を実施しました。

この訓練は、例年、秋季全国火災予防運動に因んで行っているものであり、併せて、化学科3年生の化学実験の授業の一環として行っているものでもあります。

今回行った訓練は、まず避難訓練としてH棟の最上階にあるセミナー室が出火したことを想定し、火災報知器が作動したあと、非常放送の流れる中、実際の119番通報も行い、担当者の避難誘導に従って屋外へ避難し、同時に出火元の初期消火訓練を行いました。

消火栓による放水訓練の風景

二酸化炭素消火器による初期消火訓練の風景

手際よく避難誘導、初期消火が行えたため、短時間で全員の避難が完了しました。

このあと場所を移して、消火栓を使った放水訓練、模擬火災を起こしての消火器を使った初期消火訓練及び教育ビデオを用いた講習を行いました。

参加した教職員・学生約400名は、万が一の備えとして、これらの内容について真剣に取り組みました。

（理学研究科・理学部）

学術交流促進を目的にアジア諸国を歴訪

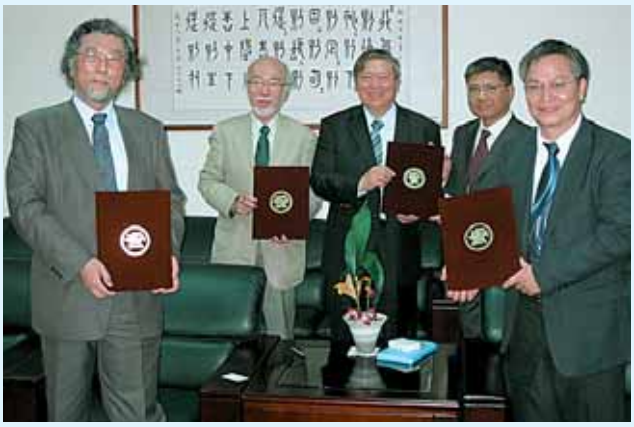
理学研究科では、学術交流促進を目的に、平成21年3月から11月にかけて、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ベトナム、タイのアジア諸国の11大学を訪問しました。

これは、①国際化拠点整備事業（グローバル30）に採択されたことにより、優秀な留学生を受けれるため、理学研究科の教員と外国の大学の教員との間に信頼関係を醸成し、その上に立って現地の大学の優秀な学生を受け入れる、②アジア諸国の学生を受け入れ、人材育成によりアジア諸国の発展に貢献する、という方針に基づいて実施されました。

各大学への訪問では、訪問先の部局長等との会談、部局間学術交流協定の締結、研究分野ごとに教員同士の懇談、学生への説明会を行いました。また、現地の日本大使館を訪問し、国費外国人留学生等に関する情報を収集するなど精力的に取り組み、今後の展開が期待される実りあるものとなりました。

訪問先一覧

台湾	国立台湾大学、国立交通大学
フィリピン	フィリピン大学、デラサール大学
マレーシア	マレーシア工科大学、マラヤ大学
インドネシア	バンドン工科大学
ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ自然科学大学、 ベトナム国家大学ホーチミン市自然科学大学
タイ	チュラロンコン大学、マヒドン大学



台湾の国立交通大学との学術交流協定を締結

マレーシア工科大学との学術交流協定を締結

ハノイ自然科学大学との学術交流協定を締結

バンコク教育研究センターを訪問

（理学研究科・理学部）

たけのこ、まきば両保育園で消防訓練を実施

11月25日(水)にたけのこ保育園で、11月27日(金)にまきば保育園で、それぞれ消防訓練を実施しました。保育園は消防法で毎年2回の消防訓練（部分訓練と総合訓練）が義務づけられており、たけのこ保育園では2度目、まきば保育園は改修後初めての総合訓練となりました。当日、たけのこ保育園は吹田市北消防署の消防士の方から、まきば保育園は茨木消防署下井分署の消防士の方から避難誘導の仕方や消火器の使い方、防火管理の心構えなど、約1時間にわたって指導を受けました。参加した保育士さんをはじめとする保育園のスタッフが真剣に訓練する中で、最初は避難訓練の様子に驚いていた園児たちも、間近に見るポンプ車に興味津々といった面もちで、消防士の方に順番に乗せてもらうと大喜びの顔になり、スタッフ、園児ともに実りある訓練となりました。

たけのこ保育園の消防訓練

まきば保育園の消防訓練

（企画部企画推進課）

大阪大学大学院薬学研究科
公開講座「くすりと医療」開催

平成21年度大学院薬学研究科公開講座が、11月7日(土)、21日(土)の2日間にわたって本研究科2号館4階特別講義室を会場として開催されました。

本講座は、薬学部6年制が導入され、薬剤師、薬学研究者の専門的かつ幅広い知識が益々必要とされている現在、生涯教育の一環として「くすりと医療」と題し、最新の知見をもとに薬学の現在の課題と将来への展望について、それぞれ最先端の分野で活躍する学内の6名の講師により語っていただきました。薬剤師を中心に、幅広い年代層にわたる約30名が受講しました。

開講に当たって、今回の公開講座の座長である宇野公之教授の挨拶と開講についての趣旨説明があり、本研究科所属の好光健彦准教授、伊藤徳夫講師、橋本均准教授、大久保忠恭准教授、辻川和丈准教授及び医学系研究科の井上修教授より講義が行われました。各講義は、抗腫瘍活性希少天然物の機能、必須栄養素と骨代謝、神経ペプチドPACAPの脳での機能、タンパク質の溶液構造に基づく阻害剤の探索、がんの分子標的治療創薬、PET分子イメージングの展開など、医療薬学、医薬品と人との接点に関わるテーマで行われ、科学的基盤から医療に至る広範な内容をご紹介いただき、受講生は熱心に聞き入っていました。

また、最終日に行ったアンケート調査では、内容的には極めて高く評価され、参加者から今後の本講座への強い期待が寄せられました。

（薬学研究科・薬学部）

ステューデント・コモンズ開設記念式典

大阪大学大学教育実践センターでは、実践センター教育研究棟（旧自然科学棟）1階・2階部分を改修し、「ステューデント・コモンズ」を開設、11月9日(水)に開設記念式典を挙行した。式典には大阪大学名誉教授、歴代の全学共通教育機構長、旧制浪速高等学校同窓会・旧制大阪高等学校同窓会の会長をお招きし、学内外の関係者のほか、多数の学生も参加し執り行われました。

式典では、工藤眞由美大学教育実践センター長の挨拶、鷲田清一総長の祝辞に続き、小泉潤二理事を加えた3名によるテープカット及び式典出席者の記念撮影が行われ、その後、ステューデント・コモンズの見学会が行われました。

ステューデント・コモンズ1階には学生から強い要望のあった談話スペースとして「カルチエ」をオープン、軽食を提供する「カフェゾーン」、組み合わせ自在な可動式机・椅子を配置した「自習ゾーン」、大阪大学多目的ディスプレイ「O+PUS」やソファーを設置した「情報ゾーン」があり、学生の主体的な学びの場、学生相互の、また学生と教員のコミュニケーションの場としての利用が期待されます。同じく1階に設置された「開放型セミナー室」はシアター上映が可能な設備も備え、中庭に面した全面ガラス窓を開放して、オーニング付きウッドデッキ、中庭と一体となってオープンな雰囲気での授業やイベントの開催が可能となっています。

また、実践センター教育研究棟。には全学的教育を担う大学教育実践センター、留学生センター、コミュニケーションデザイン・センター、グローバルコラボレーションセンター、学際融合教育研究センターが集結し、大阪大学が掲げる3つの教育目標である「教養」「国際性」「デザイン力」を総合的に追求する教育活動を展開すべく、ステューデント・コモンズ2階には各種セミナー室を整備しました。

見学会に引き続き行われた祝賀会では応援団からエールが贈られ、学生も多数参加しての賑やかな祝賀会となりました。

また、11月9日(水)から13日(金)をオープニングウィークとし、全学的教育を担う上記5部局や、学生の企画によるイベントを開催した。各イベントには留学生を含む多くの学生・教職員の参加を得て、活発な対話・交流が生まれ、日々の研究・学習・課外活動の成果を発表する機会となった。今後も学生が集い、自主的な学びの場、対話と交流の場として親しまれることを期待されます。

（大学教育実践センター）

ステューデント・コモンズ オープニングウィーク

大学教育実践センターでは、11月9日(月)～13日(金)をステューデント・コモンズ　オープニングウィークとし、全学的教育を担う関係部局（大学教育実践センター、留学生センター、コミュニケーションデザイン・センター、グローバルコラボレーションセンター、学際融合教育研究センター）や、学生の企画によるイベントを開催しました。

大学教育実践センター企画では、毎日昼休みに開催している「ひとことといちば」のスペシャルとして、小泉理事、高杉理事、工藤センター長にご登場いただき、コーヒーを飲みながらテーブルを囲んで、和やかに雑談を楽しみました。

イベントに参画した部局は、いずれも大阪大学が掲げる3つの教育目標である「教養」「国際性」「デザイン力」を総合的に追求する教育活動を展開すべく、実践センター教育研究棟Ⅰに集結したもので、オープニングウィークには日頃の活動の成果を広く学生と共有するイベントを開催し、多くの学生の参加がありました。

また、学生主催のイベントも多彩で、11月9日・10日は美術部の作品が玄関を彩った他、大学コンソーシアム大阪「ミナミCLEANプロジェクト」が企画した「危機！大阪ミナミの薬物汚染」は薬物の恐ろしさを強く訴えるものとなりました。この他、カフェスタイルやロールプレイング形式のイベントが多く開催され、留学生を含む多くの学生・教職員の参加を得て、活発な対話・交流が生まれました。

今後も学生が集い、自主的な学びの場、対話と交流の場として親しまれることを期待します。

（大学教育実践センター）

第2回 適塾講座開催

第2回適塾講座が、9月1日(火)、10月6日(火)及び11月10日(火)に大阪大学中之島センターにおいて開講されました。

この講座は、適塾顕彰事業の一環として、洪庵と塾生の足跡をたどり、適塾が果たした歴史的役割を考えるため、昨年から開講しているものです。

今回は、「江戸時代の大坂と適塾」をテーマに、適塾記念会評議員の村田路人文学研究科教授のコーディネイトのもと、海原亮住友史料館研究員が「江戸時代大坂の医療環境と適塾」、今井修平神戸女子大学教授が「江戸時代の大坂町人社会と適塾」、そして村田教授が「大坂町奉行所支配と適塾」と題してそれぞれ講演を行いました。

受講生は毎回熱心に聴講し、活発な質疑応答が行われ、最終日には受講生に対し修了証書が渡されました。

（企画部広報・社学連携事務室）

平成２１年度
適塾記念講演会開催

今年度の適塾記念講演会が適塾記念会との共催で、11月16日(月)に大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて開催されました。

当日は、鷲田清一総長（適塾記念会会長）からの挨拶に始まり、平野俊夫医学系研究科長・医学部長が「免疫にとっての自己とは？その可塑性」、また、桃木至朗文学研究

科教授が「日本史と世界史をつなぐ－阪大史学の挑戦－」と題してそれぞれ講演を行いました。

約90名の受講者が熱心に聴講し、終了後も活発な質問が出るなど、大変盛況な講演会となりました。

（企画部広報・社学連携事務室）

公開講座フェスタ２００９開催

大阪大学・適塾記念会が参画するHSN（阪神奈大学・研究機関生涯学習）ネットと大阪府との共催で行う市民向け文化・生涯学習講座「公開講座フェスタ2009」が、11月4日(水)から11月21日(土)まで、「生きる力－ひと、まち、文化の新たなつながりを求めて－」をメインテーマに「さいかくホール」（大阪府新別館北館１階）において開催されました。

本学と適塾記念会は、11月20日(金)に「私たち・社会と微生物」と題して木下タロウ免疫学フロンティア研究センター教授が講演を行いました。

講演では、インフルエンザ問題から「事業仕分け」に至るまで、受講者の興味を引く内容で、皆が熱心に聴講し、大変盛況な講座となりました。

（企画部広報・社学連携事務室）

文学研究科・文学部
セクシュアル・ハラスメント防止のための研修会

文学研究科・文学部では、11月26日(木)に性差別問題委員会主催による教員を対象とした研修会「セクシュアル・ハラスメントを防止するために―大阪大学の現状と対策―」を開催しました。学生・教職員が安心して教育研究や職務に専念できる環境を確保することは大学の責務ですが、文学研究科・文学部では毎年教職員や学生を対象として研修会や説明会を行っています。

本年度の秋の研修会は、大阪大学セクシュアルハラスメント相談室・専門相談員の中野冬美氏をお招きし、文学研究科大会議室を会場としてご講演いただきました。講演は、セクシュアル・ハラスメントとは、職場や勉学の場での権力関係によって起こるものであり、言動の受け手がそれを不快に感じるかどうかで決まるという基本的な説明から始まり、相談を受けたらどうすればよいか、という具体的な対応策まで含めた、大変わかりやすく示唆に富む内容でした。

相手が嫌だと言わなければ合意だと勝手に誤解したり、たいしたことないと見て見ぬふりをすることがハラスメントを生み出す土壌となるだけでなく、それ自体が性暴力であること、人のからだと心に土足で踏み込む性暴力は決して許されるものでないことを確認し、防止に向けたさらなる取り組みについて議論しました。

また、本研修会に合わせて11月16日(月)から27日(金)まで、同委員会では「セクシュアル・ハラスメント防止キャンペーン」を実施し、これまでに作成した「セクハラはやめよう！！」パンフレットや、「ストップ・セクシュアルハラスメント」マグネットなども活用して、きめ細かな対策に努めています。

(文学研究科・文学部)

障害学生支援室カフェ
『“ モコゲーム ”で学ぼう:聞こえない立場の疑似体験ゲーム』開催

障害学生支援室では、障害に関わる事柄をより身近な問題として考え直す機会を提供することを目的に『障害学生支援室カフェ』を開催しています。このたび、11月27日(金)にステューデント・コモンズにおいて、障害学生支援室カフェ第4回『“ モコゲーム ”で学ぼう：聞こえない立場の疑似体験ゲーム』を開催しました。参加者は、学生9名、教職員5名、学外の方6名の20名です。今回のカフェマスターは、モコゲームの開発者であるモコクラブ代表の原田美藤（はらだ みふじ）さんが務めて下さいました。

モコゲームの様子

カフェのタイトルにもあるモコゲームとは、聴覚障害のある人の立場を疑似体験し、聴覚障害のある人が経験する困難への理解を深めることを目的としたゲームです。そのルールはただひとつ「音声を使わないこと」。参加者は数名のグループに分かれ、「病院」「えき」「レストラン」という様々な生活場面におけるコミュニケーションを音声なしで行います。各場面には手話や身ぶりで応対する学生スタッフが配置され、参加者は彼らを相手に質問に答えたり、切符を買ったりしなければいけません。モコゲームでは、こうした状況を通じて、コミュニケーション手段という点でマイノリティとなりがちな聴覚障害者の置かれる立場を考えるきっかけを提供します。

参加者のアンケートには、音声を使わずに手話で話しかけてくる学生スタッフに対応しなければならない状況に戸惑いを覚え、自分たちが当たり前としているコミュニケーションのあり方を見直す機会となったという感想が書かれていました。カフェではモコゲームだけでなく、聴覚障害のあるお子さんをお持ちの原田さんの体験や思いも語られ、参加者は熱心に聞き入っていました。

(学生部キャリア支援課)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が、12月1日(火)に大学教育実践センター共通教育講義棟C－102号室で開催されました。本学では、人権問題啓発行事の一環として、例年7月と12月に講演会を開催しており、12月は人権週間にあわせて開催したものです。

今回は、女性問題をテーマとして、講師に女性と仕事研究所代表　金谷千慧子氏を迎え、「就職活動とキャリア開発における男女平等－女子学生の意識と企業の視点－」と題してご講演いただきました。

講演会では、女性が働きやすい職場環境や女性の管理職数の世界順位についてなど、様々な視点からお話いただき、当日参加した約80名の教職員・学生は最後まで熱心に聴講し、人権問題に関する認識を深めました。また、講演終了後には活発な質疑応答が行われ大変有意義な講演会となりました。

（総務部総務課）

審良静男教授文化功労者に選出

平成21年10月27日(火)、文部科学省は今年度の文化勲章受章者と文化功労者を発表しました。その中で、免疫学フロンティア研究センター(Immunology Frontier Research Center; IFReC）拠点長の審良静男教授が元横綱大鵬の納谷幸喜氏、小説家の宮尾登美子氏ら14人とともに、文化功労者に選ばれました。

審良教授は56歳という今回の受賞者の中では最も若い年齢での文化功労者選定となります。文部科学省はその選考理由として、トル様受容体（Toll-like Receptors; TLRs）をはじめとする数々の分子機能の解析により自然免疫システムの重要性を明らかにしてきたことをあげました。

免疫とは生物が外敵から体を防御するために持っている機能です。免疫はおおまかに自然免疫と獲得免疫の二つに分けられます。1990年代後半までは獲得免疫の研究が重要と考えられ、研究対象の中心になっていました。これに対し、審良教授の研究グループは病原体感染の初期に働く自然免疫システムの働きを明らかにしてきました。特に哺乳動物で10種類ほど存在するTLRs分子群の多くがそれぞれどのような病原体の体内侵入を認識するのか、さらにどのように獲得免疫への橋渡しをして生体防御を行うかを明らかにしてきた功績は、きわめて大きなインパクトを持つものです。

審良教授の研究は、それまで原始的な防御システムと考えられてきた自然免疫の重要な働きを明らかにし、従来の免疫学の教科書の書き換えさえも迫るほどです。このような際だった業績により、審良教授の論文被引用数は世界のすべての科学者の中で最高レベルに達しています。

大阪大学の現役教員が文化功労者に選ばれるのは、2001年の長田重一教授（当時医学系研究科）以来のことです。審良教授の師にあたる岸本忠三生命機能研究科教授（元大阪大学総長、後に文化勲章も受章)、さらに岸本教授の師である山村雄一元総長もかつて文化功労者に選定されています。この三代に渡る選出からも、大阪大学の免疫学研究が高く評価されていることが裏付けられています。

（免疫学フロンティア研究センター）

秋の叙勲

平成21年度の秋の叙勲が発表され、本学関係の受章者は次の方々です。

大阪大学名誉教授（元細胞生体工学センター教授）	松　原　謙　一	瑞宝重光章
大阪大学名誉教授（元理学部教授）	中　村　　晃	瑞宝中綬章
大阪大学名誉教授（元法学部長）	久　貴　忠　彦	瑞宝中綬章
大阪大学名誉教授（元理学部教授）	池　田　信　行	瑞宝中綬章
大阪大学名誉教授（元言語文化研究科長）	奥　田　博　之	瑞宝中綬章
大阪大学名誉教授（元たんぱく質研究所長）	勝　部　幸　輝	瑞宝中綬章
大阪外国語大学名誉教授（元外国語大学附属図書館長）	貝　田　　守	瑞宝中綬章
元大阪大学歯学部附属病院診療放射線技師長	角　田　　明	瑞宝双光章
元大阪大学施設部施設課電話交換手	田　中　智津子	瑞宝単光章

（総務部人事課）

第15回2009年度榊特別賞受賞

工学研究科電気電子情報工学専攻森田清三教授が第15回2009年度榊特別賞を平成21年9月29日に日本学術振興会マイクロビームアナリシス第141委員会から授与されました。榊特別賞は日本の大学として初めて透過型電子顕微鏡を設置して戦前の国産電子顕微鏡開発委員会でも活躍（名古屋大学の超高圧電子顕微鏡研究の歴史）した名古屋大学電気学科名誉教授・豊橋技術科学大学初代学長・榊　米一郎（さかき　よねいちろう）先生を記念して作った賞［榊特別賞、榊賞、榊奨励賞、榊功績賞］の最高峰の賞です。賞の授与はマイクロビームアナリシス第141 委員会第137回研究会［名城大学 名駅サテライトキャンパス（MSAT)］の授与式の場で榊 米一郎先生（96歳）から直接行われました。

（参考）

マイクロビームアナリシス第141委員会

http://jsps141.surf.nuqe.nagoya-u.ac.jp/

（工学研究科・工学部）

村上教授「第95回アメリカ歯周病学会（AAP）学術大会 R. EARL ROBINSON REGENERATION AWARD」受賞

歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学教室の村上伸也教授が、米国ボストンで開催された第 95 回アメリカ歯周病学会（AAP）学術大会において、R. EARL ROBINSON REGENERATION AWARD を受賞しました。本賞は、当該年度において、全世界で発表された歯周組織再生に関連する学術論文の中で、最も高く評価されたものに対して授与されるものです。今回受賞対象となったのは、同教室の北村正博准教授との共同して行った塩基性線維芽細胞増殖因子（FGF-2）を用いた新規歯周組織再生療法の有効性と安全性を評価した臨床研究（治験）です。本研究の成果は、日本初の新規歯周組織再生療法確立の可能性を示唆したものであり、その研究成果と将来性が高く評価されました。

（歯学研究科・歯学部）

橋川智子助教「8th Asian Pacific Society of Periodontology Meeting (APSP) Best Poster Award」受賞

歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学教室の橋川智子助教が、シンガポールで行われた 8th Asian Pacific Society of Periodontology Meeting（APSP）において、Best Poster Award を受賞しました。本学会は、アジア・オセアニアを含む環太平洋諸国で構成される国際歯周病学会であり、本賞は、本学会において最も優れたポスター発表を行った者に対して授与されるものです。授賞式は、8 月 29 日に本会議のレセプションで行われました。今回受賞対象となった研究は、「Periodontal regeneration by transplantation of human adipose tissue derived stem cells.」です。これは、歯周病により喪失した歯周組織を、脂肪組織から採取した幹細胞を用いて再生させることを目指し、ビーグル犬実験的歯周病モデルを用いてその効果を明らかにした報告です。本研究の成果は、幹細胞移植療法を含む次世代の歯周組織再生療法の開発に直結し、「口と歯」が支える中高年者から後期高齢者の QOL の維持・増進に寄与すること、そして、トランスレーショナルリサーチを通じての臨床応用（先進医療開発）の道が開かれるものと期待され、その内容が高く評価されました。

（歯学研究科・歯学部）

野口恒太君　第26回（2009年春季）応用物理学会講演奨励賞受賞

大学院工学研究科マテリアル生産科学専攻（マテリアル科学コース）結晶成長工学領域（担当：藤原康文教授）博士前期課程2年野口恒太君が、第26回（2009年春季）応用物理学会講演奨励賞を受賞しました。

この賞は、応用物理学会の春季及び秋季の学術講演会において、応用物理学の発展に貢献しうる優秀な一般講演論文を発表した若手会員（33才以下）に授与されるものです。

今回対象となった講演は、「OMVPE法によるInGaAs/GaAs:Er,O/GaInP DQW LDのEL特性（著者：野口恒太，太田祐司，土田将宏，辻尭宏，西川敦，寺井慶和，藤原康文）」であり、エルビウム（Er）と酸素を共添加したGaAsを光ガイド層としたInGaAs量子井戸レーザにおける発振波長とEr発光強度との関係を調べ、量子準位とErの励起準位間に強い相互作用が存在することを明らかにしたことが評価されました。

今回は2009年春季学術講演会（筑波大学）で発表された645件の申請講演から39名が選出されました。尚、本研究は科学研究費補助金学術創成研究費「希土類元素添加

の精密制御による物性・機能性の開拓」（研究代表者：藤原康文教授）とGCOEプログラム「構造・機能先端材料デザイン教育研究拠点」（拠点リーダー：掛下知行教授）のもとで推進されました。

（工学研究科・工学部）

山下弘巳教授「光化学協会賞」受賞

工学研究科マテリアル生産科学専攻の山下弘巳教授が、光化学協会賞を受賞しました。この賞は光化学の研究において顕著な業績をあげた者に与えられるものであり、今回対象となったのは、「ナノ構造制御した光触媒・光化学反応システムの設計と局所構造解析」の業績が評価されたためです。

山下教授は、環境浄化・エネルギー変換・環境調和型反応を目的とするナノ構造制御した新しい光触媒・光化学反応システムの設計と各種分光法を駆使した局所構造の精密解析を手掛け、新規な光触媒と光化学反応場の設計を行ってきました。特に、ゼオライト・メソポーラスシリカのナノ細孔や薄膜界面のような構造規制されたナノ反応場を利用することで、特徴ある光触媒・光化学反応の制御を実現しています。その成果は、新たな光触媒・界面光機能材料の設計に有意義な指針を与え、固体表面の光化学の発展に貢献しました。授賞式は9月17日に桐生市で開催された光化学協会総会後に行われ、受賞講演は来年9月に千葉市で開催される2010年光化学討論会において行われる予定です。

（工学研究科・工学部）

松本利映さん　国際会議「ICMFS」でBest Poster Awardを受賞

基礎工学研究科　物質創成専攻　物性物理工学領域　博士後期課程3年の松本利映さんが、スピントロニクス分野で最も権威ある国際会議の一つである20th International Colloquium on Magnetic Films and Surfaces（ICMFS）において、Best Student Poster Awardを受賞しました。

この賞は、本国際会議において最も優れたポスター発表を行った学生に対して授与されるものです。授賞式は7月24日(金)、本国際会議のClosing Sessionにて行われました。

受賞対象となった発表は「Spin-torque-induced precession in fully-epitaxial Fe/MgO/Fe(001) magnetic tunnel junctions」です。この発表は、スピントルク磁化反転とスピントルク自励発振を示す高品質エピタキシャルFe/MgO/Fe(001)- magnetic tunnel junction（MTJ）素子の作製に世界で初めて成功したこととその特性を報告したものです。従来はテキスチャ構造を持つCoFeB/MgO/CoFeB-MTJ素子で精力的にスピントルクの詳細な物理機構を解明するための研究がなされてきていましたが、不均質な結晶構造がその理解を難しくしていました。本研究により、原子層レベルの平坦性と明瞭な結晶磁気異方性をもつエピタキシャルMTJ素子がスピントルクの物理を研究する上でのモデル系として機能することが実証され、スピントルクの詳細な物理機構を理解するための道が拓かれることとなりました。本研究の先駆性と、MTJ素子の伝導特性を踏まえたスピントルク自励発振特性の考察が高く評価されました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

塩田陽一君　平成21年春季「第56回応用物理学会学術講演会」で第26回応用物理学会講演奨励賞を受賞

基礎工学研究科　物質創成専攻　物性物理工学領域　電子相関物理博士前期課程1年の塩田陽一君が、2009年3月30日～4月2日に開催された（社）応用物理学会主催の平成21年春季「第56回応用物理学会学術講演会」において発表をし、第26回応用物理学会講演奨励賞を受賞しました。

この賞は、本学術講演会において最も優れた口頭発表を行った者に対して授与されるものです。授賞式は、平成21年9月8日に開催された平成21年秋季「第70回応用物理学会学術講演会」にて行われました。

受賞対象となった研究は、「超薄膜Fe合金/MgO接合における電圧誘起磁化反転」です。この研究は、強磁性金属の数原子層に電界を印加し、電界による磁化方向の制御に関する報告です。この研究では、室温でAu/超薄膜$Fe_{80}Co_{20}$合金/MgO/ポリイミド/ITO接合において電圧による超薄膜$Fe_{80}Co_{20}$の垂直磁気異方性の変化の観測に成功しました。さらに垂直磁化膜領域においてアシスト磁界下での磁化反転の観測にも成功しました。磁化方向を電界で制御することは、低消費電力性を有するデバイスの実現に繋がり、将来固体磁気メモリーなどへの応用が期待できるので、今後の発展が期待できます。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

篠原彰教授「大阪科学賞」受賞

蛋白質研究所の篠原彰教授（蛋白質高次機能学研究部門）が、第27回（平成21年度）「大阪科学賞」を受賞しました。

同賞は、大阪府、大阪市および財団法人大阪科学技術センターの3者が大阪21世紀計画のスタートにあわせ昭和58年度に創設されたもので、創造的科学技術の振興を図り、21世紀の新たな発展と明日の人類社会に貢献することを目的として、科学技術の研究・開発に貢献した第一線の方々に贈呈されます。

篠原彰教授は、「生物の多様性を育むDNAの交換の仕組みの解明」の業績が評価され、受賞となりました。

篠原彰教授は組換えに関わる重要な発見を数多く行い、国際的にも高い評価を得ています。今後の研究が進むことにより、病気の原因となる悪い遺伝子を正常な遺伝子に置換える（究極の）遺伝子治療の開発や、流産や異数体病（ダウン症など）の原因の解明に光明を見出すことが期待されています。

平松邦夫大阪市長から表彰を受ける篠原彰教授

表彰式・記念講演は11月2日(月)に、大阪科学技術センター大ホールにおいて行われました。

（蛋白質研究所）

大阪大学共通教育賞表彰式挙行

大学教育実践センターでは、11月9日(月)にステューデント・コモンズにおいて平成21年度第1学期大阪大学共通教育賞表彰式を行いました。

この大阪大学共通教育賞は、全学共通教育の授業を担当する本学教員及び非常勤講師を対象として、優れた授業を実践した教員、優れた教科書等を著した教員、優れた著述を行った教員、並びに全学共通教育の実施運営に顕著な功労のあった教員を表彰することによって、共通教育の質的向上を図ることを目的に平成14年度に制定されたもので、今回が15回目の表彰となりました。

また、同一カテゴリーで5回目の受賞は、大阪大学共通教育賞特別賞として表彰いたしました。

この顕彰制度が教育評価の先駆的な試みとして、本学の教育の発展に寄与できることを願うものです。

大阪大学共通教育賞の選考は、全学の教員及び学生を対象に行ったアンケート結果に基づき、選考委員会において、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価した結果、15名の教員が選出されました。

表彰式では、この後行われるステューデント・コモンズ開設記念式典に出席予定の大阪大学名誉教授や教職員、学生が注目するなか、鷲田総長から表彰状と記念品の授与が行われ、参列者一同、受賞者を祝福しました。

（大学教育実践センター）

見坂 卓郎 君　国際会議「NOLTA '09」でBest Student Paper Awardを受賞
日紫喜 徹也 君　同国際会議でStudent Paper Awardを受賞

基礎工学研究科システム創成専攻社会システム数理領域博士前期課程2年の見坂卓郎君が、国際会議International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications（NOLTA 2009）において、Best Student Paper Award（Gold Prize）を受賞しました。

この賞は、本国際会議において最も優れた論文発表を行った学生に対して授与されるものです。受賞対象となった発表「Control of Selfish Routing Based on Replicator Dynamics with State-Dependent Tax」は、コンピュータネットワークにおける利己的なユーザによって引き起こされた非効率なフローを、仮想的な遅延を各経路に課すことによって解消する手法を報告したものです。アンビエントネットワークを実現する上で，より効率的にフローを制御する手法の開発が望まれています。今回の発表では、本研究の先駆性と、その詳細なシミュレーションが高く評価されました。

また、同所属　博士前期課程1年の日紫喜 徹也 君が「A Novel Resonate-and-Fire-type Digital Spiking Neuron and its Bifurcation Analysis」の題目で発表を行い、Student Paper Award（Silver Prize）を受賞しました。この発表は神経補

見坂君（右）と日紫喜君（左）

綴を目的とした神経細胞の新しい回路モデルを提案し、その解析結果について報告したものです。今回の発表ではモデルの有用性と妥当性が高く評価されました。

授賞式は10月21日(水)、本国際会議のClosing Sessionにて行われました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

松本卓也講師「日本バイオマテリアル学会　科学奨励賞」受賞

歯学研究科顎口腔機能再建学講座（歯科理工学教室）の松本卓也講師が、日本バイオマテリアル学会科学奨励賞を受賞しました。

この賞は、バイオマテリアルに関する優れた研究論文を発表している、40才未満の研究者に贈られる賞です。今回の受賞は、「物理的刺激を応用した三次元ゲル内での細胞操作」に関するものであり、持続的伸展によるフィブリンゲル内部トポグラフィーの制御と、そのトポグラフィーを利用した、材料内での細胞三次元パターニング、さらには、刺激変化によるゲル内細胞の機能制御を示したものです。医療応用、特に細胞操作における、ゲルマテリアルの新しい可能性を示したことが高く評価されました。

授賞式ならびに受賞記念講演は、11月16日(月)、京都で開催された第31回日本バイオマテリアル学会大会にて行われました。

（歯学研究科・歯学部）

米田悦啓教授「平成21年度日本医師会医学賞」を受賞

生命機能研究科細胞ネットワーク講座／医学系研究科生化学・分子生物学講座の米田悦啓教授が、平成21年度日本医師会医学賞を受賞した。授賞式は、平成21年11月1日(日)日本医師会館で行われた。日本医師会医学賞（Medical Award of The Japan Medical Association）は日本医師会会員で、医学上重要な業績をあげた研究者に授与される。毎年、基礎医学・社会医学・臨床医学を通じ計3名に授与される。米田教授は基礎医学部門での受賞であり、受賞テーマは、「核―細胞質間蛋白質輸送機構の解明と高次生命機能研究への展開」である。また、本年は、社会医学部門としては、岸玲子教授（北海道大学）が、臨床医学部門としては、波利井清紀教授（杏林大学）が受賞した。本学関係の受賞者としては、岸本忠三前総長、垂井清一郎名誉教授（平成2年）、北村幸彦名誉教授（平成6年）、松澤佑次名誉教授（平成12年）、谷口直之名誉教授（平成13年）、平野俊夫医学系研究科長（平成17年）らが名を連ねており、米田教授は12人目である。米田教授は、核―細胞質間蛋白質輸送メカニズム研究における世界の第一人者として、importin alpha/betaなどの核輸送因子の発見など、生命科学史に残る重要な発見や、新しい概念の提唱などを通して、

核蛋白質輸送の基本メカニズムの理解に大きく貢献してきた。さらに、自らの研究成果に基づき、細胞分化、発生、ストレス応答、細胞がん化などの複雑な高次生命現象の理解に向けた、独自の視点でのユニークな研究を展開しており、生命科学の新しい分野の開拓に貢献している。

（生命機能研究科）

新教授紹介

堤　　研　二　（つつみ　けんじ）　　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化形態論専攻人文地理学講座
専門分野：社会経済地理学

【略歴】
昭58. 3　九州大学文学部（地理学専攻）卒業
61. 3　九州大学大学院文学研究科修士課程（史学専攻）修了
61. 4　佐世保工業高等専門学校助手
63. 4　佐世保工業高等専門学校講師
平 2.10　島根大学法文学部講師
5. 7　島根大学法文学部助教授
11. 4　大阪大学大学院文学研究科助教授
19. 4　大阪大学大学院文学研究科准教授
21. 2　博士（文学）の学位授与（九州大学）
21.11　大阪大学大学院文学研究科教授

菊　池　　章　（きくち　あきら）　　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科生化学・分子生物学講座（分子病態生化学）
専門分野：生化学、分子生物学

【略歴】
昭57. 3　神戸大学医学部卒業
57. 4　神戸大学医学部（内科学第三講座）において研究に従事
57. 7　医員（研修医）（神戸大学医学部附属病院）
58. 7　住友病院医員（研修医）（～S59.3.31）
63. 3　神戸大学大学院医学研究科博士課程修了
63. 4　神戸大学助手医学部
平元. 2　医学博士（神戸大学）
4. 6　神戸大学講師医学部
4. 7　米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部客員研究員
6.12　広島大学教授医学部
14. 4　広島大学教授大学院医歯薬学総合研究科
20. 4　広島大学大学院医歯薬学総合研究科副研究科長
21.12　大阪大学教授大学院医学系研究科

「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY -Academic Achievement- 2008-2009」刊行のお知らせ

本学の優れた研究成果を国内外に発信する英文研究年報「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY-Academic Achievement- 2008-2009」を平成21年11月に刊行しました。平成12年の創刊以来、第10巻目の刊行となります。本誌は、全学の研究者からの応募論文のうち、人文・社会系、理学系、工学系、及び生物系の各分野から選ばれた論文100編を掲載し、その中でも特に優れた論文として論文10選、視覚的に読者の興味・関心を惹きつける論文としてグラフィックス24選をとりあげています。

教員の方にはすでに1部ずつ配布していますが、追加を希望される場合は所属部局の事務部または国際部国際連携課国際連携係（内線9572）までお知らせ下さい。

また、大阪大学ホームページにも、今後掲載する予定ですので、そちらも併せてご覧ください。
http://www.osaka-u.ac.jp/ja/research/report.html

（国際部国際連携課）

第3回　神戸大学・京都大学・大阪大学連携シンポジウム
―バイオテクノロジーによる持続可能な社会構築―

平成19年度から、大阪大学、京都大学、および神戸大学の三大学が連携して、各分野における世界に通用する人材の育成し、将来、関西の知的創造拠点を形成することを目指して、国際シンポジウムを開催しております。

昨年度は「防災・減災」分野を対象とした大学間連携による高度人材育成に関するシンポジウムを行いましたが、今年度は環境に焦点を合わせた「バイオテクノロジーによる持続可能な社会の構築」をテーマに取り上げ、下記のとおり開催いたします。

【テーマ】バイオテクノロジーによる持続可能な社会構築
【日　時】平成22年1月20日（水）10：00～17：55
【場　所】大阪国際会議場12階特別会議室（大阪市北区中之島5－3－51）
※プログラムの詳細・参加登録等はシンポジウムホームページ（http://www.3univ.jp/）をご覧ください。

第2回大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム
“大阪弁”で語り合う“かんきょう”!?
地域と大学が一緒に考える“まち育て”part II

第2回目を迎える今年のシンポジウムは、環境問題に関わる大学の役割や“まち育て”の観点もからめながら、“大阪弁”＝生活者のことばで、“かんきょう”についてじっくり市民と専門家が語り合う場にしたいと考えています。司会進行には毎日放送アナウンサーの西靖さんを迎え、落語家の桂吉弥さんにも参加いただき、楽しい落語も披露していただきながら、市民の代表としてもタウンホールミーティングにご参加いただく予定です。皆様のご参加をお待ちしています。

■主　　催：大阪大学21世紀懐徳堂
■会　　場：大阪大学中之島センター10F　佐治敬三メモリアルホール
〈大阪市北区中之島4－3－53　TEL 06－6444－2100　http://www.onc.osaka-u.ac.jp〉
■日　　程：平成22年1月24日（日）
時　　間：13時00分～17時30分（開場：12時30分）
■参加対象：一般市民、学生
■参 加 費：無　料（要申込）
■募集人数：180人（先着順）

プログラム・申し込み方法等の詳細は大阪大学21世紀懐徳堂ホームページ http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/ をご参照ください。

蒜山高原の自然を満喫　ひるぜんセミナーハウス
平成22年4月から学生の方のみによる利用開始!

ひるぜんセミナーハウスは、研修・セミナー等の施設として設置されております。
場所は、岡山県の蒜山高原にあり、自然に囲まれた絶好の場所に位置しています。
さわやかな新緑、燃えるような紅葉、真っ白な雪景色……、気候がよいときは、屋外でジンギスカンが楽しめます。
四季を通じてご利用いただけますので、研究室のセミナー旅行、ご家族・グループでの観光等にご利用ください。

◆ **利用範囲：**

利用範囲	利用者の内訳
学生、教職員	1　本学の学生及びその同伴者 2　本学の職員及び同伴者 3　1・2以外で総長の承認を得た

◆ **予約受付：**

利用開始日の※3ヶ月前から
〔学生の方は、平成22年1月から予約受付〕
利用願を使用予定日の2週間前までに提出
※利用開始日の3ヶ月前の同一日。同一日が休業日の場合は翌業務日

◆ **利用申込み：メールによる申込みに変更**
〔平成22年1月から〕

申込み先：総務部総務課総務係
e-mail：soumusoumusoumu@ns.jim.osaka-u.ac.jp

空き状況の確認〈メール〉
〔内容〕
・利用目的
・利用期間　　○月○日～○月○日（□泊□日）
・利用人数（大人、小人、性別）
↓
利用可否の連絡〈メール〉
↓
申込み〈メール〉
・利用願の送付
↓
利用許可書の送付〈学内便〉
・許可書の送付

◆ **利用料金：**

区　分	利用料	備　　考
朝　食	400円	
夕　食	1,100円・1,500円	
利用料	1,000円	2日目以降700円 H22.4から

※夕食については、定食、ジンギスカン、寄鍋（冬季限定）1,100円
焼肉、かに鍋（冬季限定）1,500円が選べます。

◆ **宿泊室：利用定員　17人**
◇和室6畳3室：各2名
◇和室8畳1室：　3名
◇和室10畳2室：各4名

◆所　在　地：
岡山県真庭市蒜山上福田921－3
（米子自動車道蒜山ICから約5分）
TEL　0867－66－3096
◆休　館　日：
毎週水曜日及び年末年始
（12月29日～1月3日）
※火曜日と12月28日は宿泊できません。

※ひるぜんセミナーハウスの概要については、阪大NOW10月号（ホームページ）をご覧ください。

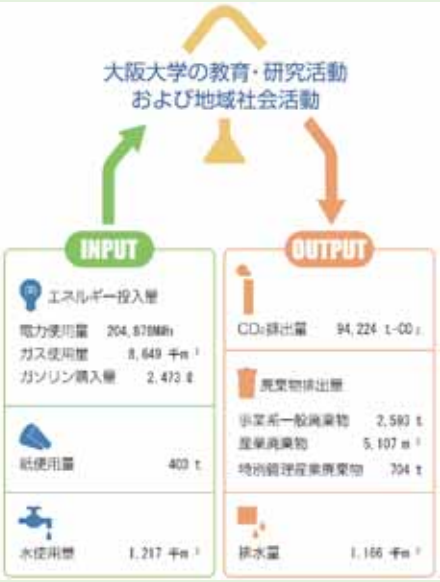
問い合わせ：大阪大学総務部総務課総務係
〒565-0871　吹田市山田丘1－1　電話：06－6879－7014（内線　吹3006）
e-mail：soumusoumusoumu@ns.jim.osaka-u.ac.jp

大阪大学環境報告書2009　ダイジェスト

大阪大学環境報告書 2009 は、2008 年度の教育研究活動に伴う環境負荷の状況や環境配慮の取り組みについて公表するものです。ここでは本報告書をダイジェストで紹介します。なお、大阪大学環境報告書は大学公式 HP の法人情報の公表ページに掲載しています。（http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho）

■ 2008 年度の環境目標と実績

環境方針	項　目	目　標	実績等
1、法律等の遵守	産業廃棄物処理	マニフェストに基づく管理の徹底	適正に実施
	化学物質の取り扱い	薬品管理システムの運用の促進	薬品データベースの更新
	アスベスト対応	吹付け材の実態調査および除去	実施済
	PCB対応	適切な保管・管理	大阪府へ届出済
2、環境負荷低減	エネルギー使用量	電力使用量の前年度比床面積原単位1%削減	豊中　1.7%減　吹田　0.7%増 箕面　－
	グリーン購入推進	特定調達物品の目標100%	目標達成
	廃棄物リサイクル	一般廃棄物のリサイクル率向上	豊中　56.9%　(+18.2%) 吹田　40.6%　(+0.7%) 箕面　26.8%　(　－　)
3、キャンパス・サステイナビリティの実現	地域社会との連携	地域と協力して環境保全に関する活動を行う	緑のデザイン賞「緑化大賞」を受賞
4、環境マネジメントシステムの運用	大学構成員（教員、職員、学生）の意識向上	学内への情報発信	大阪大学環境報告書2008の公表 環境月間講演会の開催 防災訓練等の実施
5、周辺地域との情報の共有	周辺地域への情報公開	周辺地域への情報発信	大阪大学環境報告書2008の公表 大阪大学公式HPの随時更新



◆電力使用量について

2008 年度の電力使用量は 2007 年度に比べ、約 2%増加しました。原単位当たりの使用量については、吹田キャンパスで 0.7%の増加、豊中キャンパスで 1.7%の削減となっています。

◆ガス使用量について

2008 年度のガス使用量は 2007 年度に比べて増加しました。ガスは大部分を空調に使用しており、新しい研究棟の整備等により空調面積が増えたことにより増加したと考えられます。

◆紙購入量について

2008 年度のリサイクル率は 99.4%で、環境負荷を低減する努力を行っています。

◆ CO_2 排出量について

2008 年度から通年で、箕面キャンパスの排出量が加わったことと、電力会社の CO_2 排出係数が増大したことにより、温室効果ガス（CO_2）排出量は増加しました。

■様々な取り組み

◆耐震改修

新耐震基準（昭和56年建築基準法改正）以前に建設された建物で、耐震性能が劣ると判断された建物について、第2次国立大学等施設緊急整備5か年計画（文部科学省）において示された整備方針に基づき、耐震改修整備を進めています。

2008年度は、総合図書館、理工系図書館、工学部管理棟、産研第1研究棟、蛋白研本館の耐震改修を実施し、安全・安心な教育研究環境の整備に努めています。

◆学生、教職員の健康を守るために実験室の作業環境の測定を実施しています

大阪大学では、化学物質に携わる研究に従事する学生、教職員の化学物質による癌、皮膚炎、神経障害その他の健康障害、有機溶剤などによる中毒を予防するために、法律（労働安全衛生法　特化則第36条、有機則第28条）に従って、作業環境の測定を行なっています。測定は専門機関により実施され、定められた評価に基づき相当する措置を講じています。

◆シンポジウム「低炭素社会を目指す環境まちづくり」開催

サステイナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）は1月15日、大阪大学中之島センター10階の佐治敬三メモリアルホールで、シンポジウム「低炭素社会を目指す環境まちづくり」～まちづくり編～『低炭素社会を展望する環境都市づくり』を開催しました。

参加者は140人にのぼり、最後には低炭素社会を目指す環境まちづくりに向けた宣言文（案）が発表され、非常に意義深い機会となりました。

◆新たな障害者雇用への取り組み－障害者雇用促進法に基づく障害者雇い入れ計画の推進

「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、障害者の雇用に積極的に取り組んでいく必要があります。

その取り組みの一つとして、14名の知的障害者の方を用務補佐員として採用しました。また、これらの方々の業務が円滑に行われるようにするため、一緒に作業を行いながら支援を行う非常勤職員を6名別途採用しています。支援にあたる人たちといくつかのチームに分かれて、吹田キャンパスのメインストリートを中心とした清掃業務等を行っています。

◆緑のデザイン賞「緑化大賞」を受賞

豊中キャンパス東口環境整備計画が第19回「緑のデザイン賞」の「緑化大賞」に選ばれました。この賞は、地域社会の質的向上を目指し、全国から新たに提案される緑化プランを募集し、優秀なプランに対してその実現のための助成を行うために設立されたものです。

平成21年3月にスロープとその周辺部分が完成し、その後豊中市によって隣接する斜面部分の公園的整備が行われる予定です。

今回の受賞により大阪大学で整備を行う植栽の一部が助成されることとなりました。

環境報告書をダイジェストで紹介しましたが、エネルギー使用量は年々増加傾向にあります。報告書をご覧頂き、大阪大学の現状について認識し、環境負荷低減に向けた取り組みへの積極的なご参加をお願いします。

記　念　講　義

平成22年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局（講座・部門等）	氏　名	日　時・場　所	講　義　題　目
文学研究科（英米文学）	玉　井　　暲	平成22年2月23日(火) 14時40分～16時30分 文法経講義棟4階 文41番教室	イギリス世紀末文学の面白さ
文学研究科（演劇学）	天　野　文　雄	平成22年3月4日(木) 16時～18時 総合図書館6階 図書館ホール	禅竹序説
理学研究科 （化学専攻・物理化学講座）	笠　井　俊　夫	平成22年3月9日 理学部大講義室(D501)	「Panta Rei 化学反応に魅せられて」
理学研究科 （化学専攻・学際化学講座）	鈴　木　晋一郎	平成22年3月9日 理学部大講義室(D501)	「生物無機化学 40 年と共に」
医学系研究科 （外科系臨床医学専攻器官制御 外科学講座泌尿器科学教室）	奥　山　明　彦	平成22年2月15日(月) 16時～17時30分 (医学部A講堂)	アンドロロジーとは？ ～今、取り組んでいることを中心に～
医学系研究科保健学専攻 （医療技術科学分野 医用物理工学講座）	藤　原　英　明	平成22年3月1日 16時～17時20分 (保健学科講義棟第1講義室)	「NMR に魅せられて 42 年 ―MRI に輝く未来を感じて」
医学系研究科 （内科系臨床医学専攻内科学講座呼 吸器・免疫アレルギー内科学教室）	川　瀬　一　郎	平成22年3月25日(木) 16時～17時30分 (医学部A講堂)	肺がん最前線の 38 年
歯学研究科 （口腔分子免疫制御学講座 予防歯科学）	雫　石　　聰	平成22年3月4日(木) 15時～16時30分 大講義室	予防歯科学と苦楽を共にして 38 年
歯学研究科 （顎口腔機能再建学講座 歯科理工学）	荘　村　泰　治	平成22年2月3日(水) 16時～ 大講義室	金属物性基礎研究から歯科臨床応用 研究まで走り続けた 40 年
薬学研究科 （応用医療薬科学専攻 神経薬理学分野）	馬　場　明　道	平成22年3月15日(月) 14時～15時30分 薬学研究科2号館 特別講義室(4階)	「脳とくすり」に魅せられて
工学研究科 （環境・エネルギー工学専攻 環境システム学講座）	加　賀　昭　和	平成22年3月10日(水) 15時30分～17時 工学研究科S4棟111講義室	流されて環境工学 39 年
基礎工学研究科 （物質創成専攻未来物質領域 微小物質ダイナミクス講座）	伊　藤　　正	平成22年3月4日(木) 15時～16時30分 基礎工学部国際棟 ディスプレイ室	励起子とともに 40 年： 一基礎工学者は何を見たか
言語文化研究科 （言語文化比較交流論講座）	木　村　健　治	平成22年2月23日(火) 16時～17時	演劇学の視点によるギリシア・ロー マ演劇研究の可能性
言語文化研究科 （言語文化システム論講座）	金　子　元　臣	平成22年2月23日(火) 15時～16時	生と芸術あるいは知との親和性 ―生の新たな可能性

部局（講座・部門等）	氏　名	日 時・場 所	講 義 題 目
国際公共政策研究科	松 田　武	平成22年2月18日(木) 10時30分～12時 国際公共政策研究科棟 講義シアター(2階)	「地球人として誇れる日本をめざして －日米関係からの洞察と提言－」
情報科学研究科 （マルチメディア工学専攻ヒューマンインタフェース工学講座）	岸 野 文 郎	平成22年1月29日(金) 15時30分～17時 コンベンションセンター2階会議室2	人に優しいヒューマンインタフェースを目指して
生命機能研究科 （ナノ生体科学講座）	柳 田 敏 雄	平成22年3月16日(火) （銀杏会館）	潮流に逆らって
高等司法研究科 （法務専攻）	小 杉 茂 雄	平成22年1月26日(火) 13時～14時30分 文系総合研究棟4階 講義室401	保証責任制限の将来
接合科学研究所 （スマートプロセス研究センター スマートグリーンプロセス学分野）	竹 本　正	平成22年3月11日(木) 15時30分～17時 （大阪大学荒田記念館）	環境配慮型多点一括接合にはまって35年（仮）
世界言語研究センター （アジア言語文化圏研究部門Ⅰ）	小野田　求	平成22年2月1日(月) 5限目 箕面キャンパスA棟305教室	朝鮮近現代研究－朝鮮語文献講読－
核物理研究センター （核物理研究理論部門）	土 岐　博	平成22年3月1日 15時～17時 接合科学研究所荒田記念館	パイ中間子とともに歩んで

海外拠点短期語学研修最前線（後編）

大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長
谷　本　親　伯（たにもと　ちかおさ）

2009年8月現在、サンフランシスコ教育研究センターで取り扱っている、3種類の短期語学研修プログラムのうち、前回は、「工学英語（大学院生対象）」、「一般英語（学部生対象）」について報告した。今回は、「歯学英語」について報告するとともに、最後に、大学における語学、特に、英語教育に関して、実践に基づく所見を報告したい。

■ 歯学英語

「歯学英語」（Dental English）は、本年度（2009年度）に新設したもので、正式には「米国歯科英語研修プログラム」（歯学研究科責任者：天野敦雄教授）である。院生（2,3年）・研修医の中から、積極的な意欲を最重要視して選抜された10名（内、女性4名）が受講した。専門分野が明瞭であり、工学英語での経験を活用して、受け入れ機関候補先の詳細調査を行った結果、5つの候補の中から、Monterey Institute for International Studies（MIIS）を選んだ。理由は、英語研修については、「全米一」の定評を受けていることにある。過去においても語学研修先の候補の一つであったが、質の高い研修を提供するため、研修費用もそれだけ高額であった。（語学研修の準備においては、費用の抑制が常に、目的と相反する課題である。）

研修の主目的は、「診察時の医師と患者との円滑な会話」および「研究発表スキル習得」の二つである。MIISには、多彩な教師が控え、今回の研修には、熟練教師2名（男性・女性）が担当した。研修初日から、ごく普通の速さで話し、これに対して、研修生の理解を確認し、語彙の増加と円滑な発音を訓練することから始まった。教材は、医療関係の新聞やジャーナルの記事から抽出されたものである。モントレーに3週間という短期の研修期間中にできるだけ多くの、一般では使用されない医科歯科分野の専門用語を研修に含ませたいとする意図があった。担当教師が事前に、モントレー地区の歯科医師会や数名の歯科医と相談し、専門用語やジャーナルの紹介を受けて教材を選んでいる。

基本的な能力である「聞き取り」（Listening）、「朗読」（Reading）、「口頭表現」（Speaking）、「英作文」（Composition）について、随所に説明と確認が入る。参観者である筆者には、「定性的・定量的表現」と「自分なりの表現」が求められているように感じられた。教師が教材を使って説明する時間と、2－3名の小グループに分けグループで考える時間とが交互に配置されていた。

初日の午後、徒歩で行ける距離にある歯科クリニックを訪問し、米国の診療所の内部を見学し、診療に使用される検査装置などについても詳しい説明を受けている。研修生は、全員、歯科医師の免許を取得し、診療行為の経験があり、患者の反応や検査装置の細部にまで及ぶ質問を行っている。説明する歯科医の予測を越えた研修生の質問の鋭さに対し、付き添う者には、力強く感じられたことを付記したい。MIISでの教育方法は、3週間、ほぼ同様に継続され、時折、複雑で難しい言葉に対し、「どのような意味か？」を問いかけ、グループで考えさせた上で、解説することも見受けられた。これらの繰り返しが、英語での応答時間を短くさせている。

筆者は、英語教育の専門家ではなく、土木工学の分野で教鞭をとって来て、60代の半ばにして「品格のある英語を使いたい」と願う修行の身であるが、立場的に、浅学非才を顧みず、敢えて評価すれば、「原理原則から出発する日本的教育」と「つねに具体的な課題から、個々の考え方を展開させる米国流教育」の対比がみられたと言えよう。3週間の語学集中研修は短い。各自10分のプレゼンテーションの時間は、すぐに到来した。ユニークと感じたのは、1名の発表者につき、同じMIISにて国際関係を専攻する、英語の堪能な学生3名を配置し、発表直後に細かく評価させ、本人の改善点を具体的に指摘させたことである。「教師対学生」の目線ではなく、同年齢で第三者としての聴衆の目からどのように理解されたかを伝えさせている。10名の研修生は、「日米の生活に対する姿勢」や「歯磨きと

食生活」、「歯科医としてみたブラッシングの相違点」、「ホームステイでの生活」など、直接体験に基づく知見を発表した。3週間という短期間の成果として捉えるならば、全員所期の目的を十分に達成したと思える見事な発表であった。

歯学英語は、これで終わっていない。さらに、有意義な研修が第4週目に準備されていた。すなわち、MIISでの研修は、英語そのものを習得するものであったのに対し、カリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）の講義の一部やインターンシップなど専門教育に関するものである。午前中3時間は、当センターの会議室にて、講義と質疑応答に費やし、その後、場合により、昼食時間にも食い込んで、コーディネータ（Dr.John Ino）の用語解説があった。そして、午後は、市中の歯科クリニック4か所に分散して、診療現場を視察し、視察後、診察医を交えて、実際に医師と患者の間で交わされた会話の不明瞭な部分や重要性について、付加的解説と討議を重ねたことにも研修の濃度が感じられる。

午前中の講義は、UCSF歯学部の教授5名によるもので、①「歯学における重要用語の解説と米国における概況」（Dr. John Ino）、②「感染制御」（Dr. Molly Newlon）、③「再生保存歯学」（Dr. Grant Tsuji）、④「歯周病」（Dr. Mark Ryder）、⑤「レジン治療」（Dr. Mike Staninec）であった。このような講義を介したUCSFの教授陣との接触だけでなく、看護学科の学生を含む歯学部学生との交流会も催された。さらに特筆すべきことは、カリフォルニア歯科医師学会（California Dental Association/CDA）がサンフランシスコにて開催中であり、学生特別登録制の特典を受け、9月11日(金)11：00から5時間にわたり、学会場および展示場（材料・測定機材をはじめ歯学・医療にかかわる製品）を視察する機会が与えられたことである。UCSFのJohn InoおよびGrant Tsuji両教授の献身的な支援がなければ、ここまでの研修内容に至らなかったであろう。

■ 語学学習の意義

ここに述べる短期語学研修の今年度の開始直前に、G30への対応と採択があった。一方、当地近郊の主要な大学での留学生の占める割合は、30%以上というのが普通である。大学院になるとさらに高くなる。日本の大学においても、留学生を特別視することなく、英語を共通言語とする学生の比率が急激に増加するという事態を直視すれば、コミュニケーションを英語で行わなければならない状況が増加していることは論を待たない。少なくとも理工医系の分野では、英語を介した授業・研究討論・情報交換は、日常行為として取り扱う準備が不可欠である。

また、「多様化の時代の大学教育」として、すなわち、「国際化の中の大学教育」として、「カリキュラムの中に何のためにこの教科が存在するか、そして、どのように機能させるか」という問に答えるためには、大学における「知の創造・伝達・周知」の基礎としての英語基礎教育を見直すことが不可欠と考える。「大学全体としての英語の能力は、自分たちの意識よりもはるかに低い」という指摘に対して、読者はどのように反論されるか。

1999年以来、EUを中心に展開される教育改革（Bologna Process)）が、現在、米国の教育界にも「飛び火」し、この数年、急激に早急な対応が求められていることも知らしめられている。学生の可動性の高い、国際化された大学の条件として「短期留学（学期単位）の制度化」、すなわち、「単位互換制の確立」と「共通言語（英語）での授業の授受」が基本となってきた情勢の中では、日本の大学生の英語教育、あるいは、大学に至るまでの語学教育のプロセスがもう一度、根本から見直されなければならないと痛感する。

今回、この紙面で報告した短期語学研修は、大阪大学が他大学に先駆けて実施するもので、すでに多くの知見が蓄積されている。多くの学部・研究科において、一般英語以外にも専門分野ごとに、大阪大学の意志が反映された語学研修プログラムが増えることを祈る。

■ 結言

英語圏で直接、語学研修の機会を与えられる学生の数は、全学学生の0.3%以下である。せめて、この比率が数%になるような工夫と、このような研修から得られた知見を全学の学生教育にフィードバックできるような受け皿が望まれる。現地研修者をパイロットにし、大学での英語教育の焦点をより明確にして、大阪大学をさらに国際化してゆくように励みたい。

サンクトペテルブルク大学（ロシア）

Санкт-Петербургский государственный университет（Saint-Petersburg State University）

サンクトペテルブルク大学は1724年、ピョートル大帝の命によって当時の首都サンクトペテルブルクに設立されたロシア最古の大学です。現在は、生物学部、地学部、数学部、医学部、物理学部、化学部、東洋学部、経営学部、地理学部、ジャーナリズム学部、国際関係学部、心理学部、社会学部、文学部、哲学部、政治学部、経済学部、法学部等、20の学部と教員数約6,000人を擁し、約32,000人の学部学生、約4,000人の大学院生が学ぶ国内トップクラスの総合大学として、モスクワ大学と並び大統領認可による二大特別大学のひとつに指定されています。

化学者メンデレーエフや生理学者パブロフ、経済学者レオンチェフ等のノーベル賞受賞者をはじめ数多くの世界的レベルの研究者を輩出しており、また現政権のプーチン首相、メドヴェージェフ大統領もサンクトペテルブルク大学の卒業生であるなど、ロシアの学術界、政界をリードする拠点大学として注目を浴びています。日本との交流も活発に行っており、2006年には国際交流基金から国際交流奨励賞を授与されました。

本学言語文化研究科・外国語学部とは、前身である大阪外国語大学時代より20年以上に亘って学生・大学院生・教員の相互派遣が行われてきましたが、このたび核物理研究センターとの連携により大学間学術交流協定締結に至りました。両大学間で今後、より広範囲な分野での多面的学術交流を展開すべく、協定の具体化に向けての作業が始まっています。

ウェブサイト：http://www.spbu.ru/

編　集　後　記

大阪大学が平成23年（2011年）に創立80周年を迎えるということを皆さんご存知でしたでしょうか。今号の記事をご覧になって初めて知った方も多かったかもしれません。

来年から創立80周年にちなんだ様々な催しが企画、実施される予定となっています。

ぜひ皆さんで大阪大学創立80周年を盛り上げて行きましょう。

（柿木）

陸上競技部

走思走愛

陸上競技と聞くと走るだけということを想像する方が多いかもしれません。しかし、そんなことはありません。走るのでも短い距離があれば長い距離もあります。バトンやタスキをつないで走ったり、走る途中に障害があったりもします。それに、上に跳んだり横に跳んだり棒を使って飛んだり。投げるにしても投げるものは多種多様です。

また陸上競技というものは基本的に相手と自分との勝負です。味方が助けてくれるという事はありません。勝てば自分のおかげですし、負ければ自分のせいということです。そして勝ち負けが誰の目に見てもはっきりわかるというのも陸上競技の特徴です。そこに真剣勝負の場が生じるわけです。この真剣勝負というものは面白いもので、相手や自分が本気になればなるほど勝った時の喜びもまた大きなものになります。こればかりはやってみないと分からないのですが、残念ながら私たちの周りにはこの真剣勝負のできる場というものが非常に少なく、それだけ陸上競技というのをやってみる価値があると思います。そして、その真剣勝負に勝つために練習していくのですが、その過程で自分の記録を超えていくことになります。これもまた面白いものでして、自己記録を出すということはまぎれもなくその瞬間の自分が今までの人生で最も速いだとか遠くに跳べるということであり、そういうことを実感できるのも陸上競技の醍醐味だといえます。

現在、私たちの部には様々な人間が在籍しています。大学に入って陸上を始めた人もいれば、全国・関西トップレベルの人もいます。様々な学部、様々な競技の選手がいますが、みんな自分の目標に向かって日々練習に励んでいます。

主将　有村　孝（基3年）

〈コメント〉
陸上は個人種目と思いがちですが、対校戦でチームとして勝ちとる勝利はこの上なく素晴らしいものです。興味のある方は是非見学に来て下さい。

練習場所：吹田グラウンド
練習日時：月～金 15 時 20 分～、土 10 時～
部 員 数：86 人
連 絡 先：kei3000sc@softbank.ne.jp
（主務；守谷慶祐）

OSAKA UNIVERSITY

トピックス

第５０回まちかね祭開催

11月1日(日)～3日(火)の3日間にわたって、大阪大学豊中キャンパスにて第50回まちかね祭が開催されました。今年のテーマである「千客阪大」。これは第50回目の記念すべき「まちかね祭」ということで、これまで開催された「まちかね祭」より多くの方に来て頂きたい。そして、より満足して頂きたい。という実行委員の想いを込めて、「千客万来」にかけて決まりました。例年以上に多くの方に来て頂くには、事前に多くの方にお知らせしなければなりませんでした。そこで今年は今までに無かった様々な取り組みを行いました。具体的には、O＋PUSを使ってのまちかね祭の宣伝動画の放映、大阪大学公式トップページデザイン・まちかね祭公式HPへリンクしたバナーの掲載、さらにはフライヤー入りポケットティッシュの配布です。このように多種多様な事前広報を行ったことで、例年以上にまちかね祭のアピールが出来たと思っています。

「千客阪大」を学生が主体となって作り上げた大学祭は、3日間とも晴天だった昨年・一昨年とは異なり、1日目が大雨、2日目が強風と生憎の天候となりましたが、最終日は寒いながらも晴天となり1日目・2日目に来られなかった方にも足を運んで頂き、非常に多くの来場者で賑わいました。

ステージでは多くのサークルが演奏や演技を行った他、3日目のフィナーレにおいてはアーティストライヴに始まり、見るものを幻想の世界へ誘うレーザーショー、お笑いNo.1を決定するO-1グランプリの決勝、特大スクリーンでのウイニングイレブン大会の決勝、候補者がドレス・タキシード姿で登場したMiss & Mr. 阪大CONTEST 2009のグランプリ発表など休む間もなく様々な企画が行われ、ステージが大変盛り上がりました。特にフィナーレは、実行委員が昨年の11月から、約1年もの間練りに練ったもので、その甲斐もあって大変多くの方にご覧になって頂き、楽しんでいただけたと思います。

模擬店では、2日目に強風の影響を受けながらも、学生が熱心に呼び込みをしている姿が目立ち、メインストリートを賑わせていました。

その他にも大学のいたるところでさまざまな企画が行われ、記念すべき第50回まちかね祭に相応しい活気のある大学祭となり、大きな事故もなく大好評のうち成功裡に終えることができました。

最後になりましたが、この場をお借りして本年度のまちかね祭に協力していただいた関係者の皆々様に改めてお礼を述べさせていただきます。

（大学祭中央実行委員会　広報局長　杉本　祐樹）

ゲート

メインストリートの様子

レーザーショー

阪大NOW　No.114　2009 12月号　2009年12月20日発行

編集　大阪大学広報・社学連携室
発行　大阪大学企画部広報・社学連携事務室　〒565-0871　大阪府吹田市山田丘1-1
TEL：06（6879）7017　FAX：06（6879）7156
ホームページアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp/

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail : kikousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp

この冊子は人類環境浄化のためのエコー認定の再生紙を使用しています。
000530